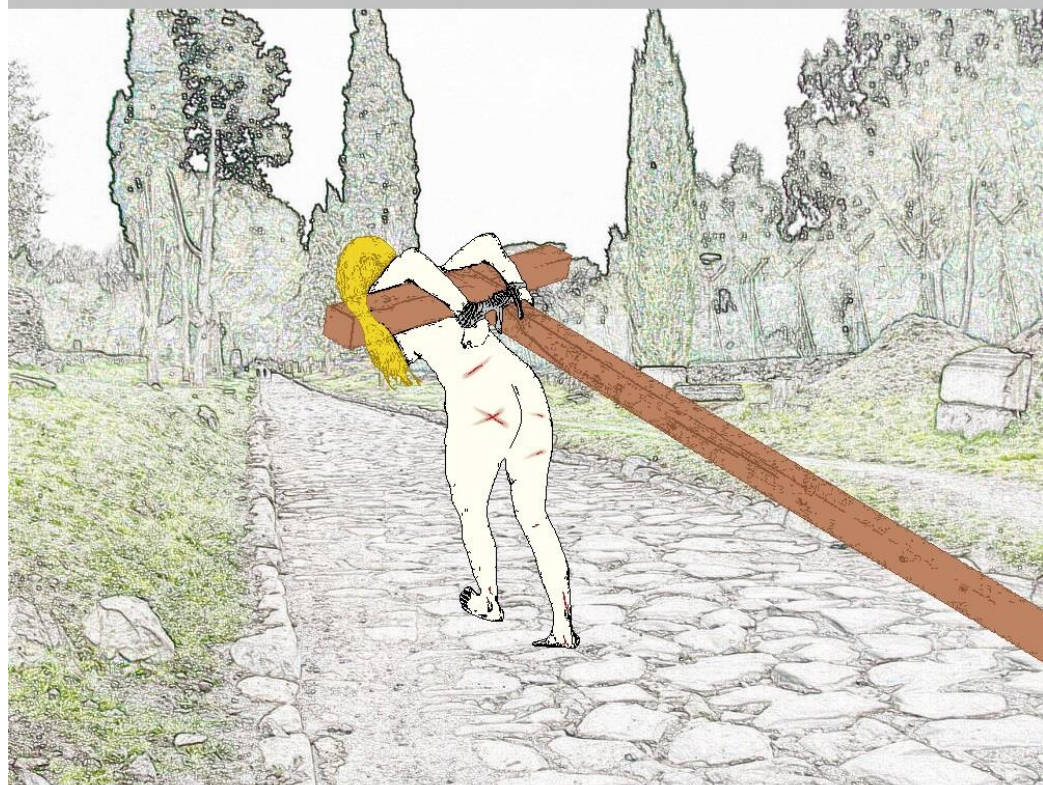


虐巡女公

伯爵令嬢から

娼婦・盗賊・女囚を経て

性隷修道女に堕ちる長い道程



恭長門濠

目次

育まれた悦虐.....	- 3 -
誘拐と凌辱と.....	- 12 -
娼館での生活.....	- 23 -
娼婦への折檻.....	- 60 -
伯爵家の搜索.....	- 77 -
浮浪児盗賊団.....	- 83 -
盗賊への拷問.....	95 -
灼熱上の踊り.....	- 137 -
広場での処刑.....	- 146 -
救出と静養と.....	- 155 -
淫虐の修道院.....	- 161 -
継母の嗜虐愛.....	- 182 -
三位一体の典.....	- 207 -
後書き.....	- 215 -

この物語はフィクションです。登場する人物・組織・地名・歴史・年齢などは実在しません。登場人物の台詞や内言は、筆者の信条とは無関係です。終盤で特定の宗教を貶めているような記述がありますが、あくまでも架空の宗教です。現実の宗教には、筆者は相応の敬意を払っています。死後の世界など信じていませんが、もし万一本当に存在してたら、地獄行きはご勘弁なので。

表記について

この物語は、12世紀頃のイタリアをイメージしています。したがって……

1：日本語に固有の言い回しは避けています。

大の字磔 → “X” 字形に磔

有難迷惑 → 嬉しくない好意

数珠つなぎ → OK

(数珠はロザリオの近似概念)

聖隷⇔性隷とかの言葉遊びはしています。

2：21世紀の言葉は極力排除しています。

真逆 → 正反対／真反対

ガチ／マジ → ほんとうに／まったく

3：外来語は言い換えるか当て字を使います。

ランプ → 角灯、明かり

パン → 麵包

スープ → 汁

スパイス → 薬味

スカプラリオ

→ 修道女が衣服の上に着用する肩衣

長い布に穴を明けて襟を着けた

ドラクエの僧侶の服装とは書けません。

育まれた悦虐

「エレナお嬢様、就寝の時刻でございます」

教会の鐘が鳴るとすぐに、侍女のジーナが告げました。

私は無言で立ち上がります。ジーナが衣服を脱がせてくれて、私は腰布一枚の姿になります。亜麻布ですが、形はひどく変わっています。股間を隠す逆三角形の布と三本の紐だけ。下生えこそ隠せますが、お尻は剥き出しです。これは、男に身体を売る女が「仕事」のとき身に着ける下着だと、お継母様はおっしゃいました。このような破廉恥な下着を身に着けることで、己れの淫乱な性格を常に意識していなさいと。

私の性格を矯正しようとしての処置なのですが、どう考えても逆効果です。

私は寝台に仰臥して、手足を“X”字形に広げます。手首と足首そして膝の上に、寝台の隅から伸びた鎖につながれた枷が嵌められていきます。枷の内側には柔らかな分厚い布が貼られていますから、夜毎に拘束されても肌に痕は残りません。もちろん、枷を外そうとして私がもがいたりしなければ——ですが。

私を拘束し終わるとジーナは、腰布というよりも股隠しの布の紐をほどいて、女性器を剥き出しにしました。腰布も布団も、身体に熱がこもって淫らな気分を誘われるから、この姿で寝なければならないのです。冬になれば毛布くらいは掛けてもらえるでしょうけど、そんな先のことは心配する気にすらなれません。

すべての処置を終えると、ジーナは慰撫に挨拶をします。

「では、お嬢様。お休みなさいませ」

角灯の明かりを消して、ジーナが退出します。

月明かりも窓掛で遮られた部屋に独り、寝返りも打てず仰臥して。すぐに寝付けるものではありません。日常生活では、むしろお父様よりも身近な絶対的支配者であるお継母様

の指図で、このような羞ずかしい形にされているのだと思うと……お継母様への反感が胸にわだかまっているにも係わらず、腰の奥にじれったい感覚が募っていきます。

侍女の監視の目を盗んで自らを慰めたのが十日前。割れ目の上端に隠れている実核が、刺激を求めて硬く凝っています。

そう——そういう悪戯が出来ないようにと、私は夜毎に四肢を拘束されているのです。

私が浅墓でした。でも、こんな気持ちの良いことは、妹のベルタにも教えてあげたくて……まさかお継母様に告げ口されるなんて。お継母様が、あれほどにお怒りになるなんて。

事の発端は、ちょうど一年前でした。お継母様がお嫁入りのときに持参された宝石箱を、侍女の一人が盗んで売り払ったのです。ニナは逃亡を図りましたが、悪運尽きて捕らえられ、処刑されることになりました。

換金すれば千^{アルダ}銀貨以上にもなる財宝を盗んだのです。首切りか、火刑に処されても当然です。けれどお継母様は慈悲の心を発露なさって、彼女を助命したばかりか賠償の機会さえ与えられたのです。もちろん、まったくの放免ではありません。

私たちラメーズ伯爵家の者も、処罰に立ち会いました。

彼女は腰布一枚の裸身にされて、首と両手を一枚の板枷で拘束されました。極端に丈の短い腰布です。男物の腰布は、救世主様が磔にされている絵に描かれている通りですが、女物は股間を包まず、腰に巻き付けるだけです。その代わりに、太腿の半ばを覆う丈があります。ニナに与えられた腰布では、肝心の部分が今にも見えそうです。そんな羞ずかしい不名誉な姿で引き回されて、街を一周するのです。

「ああ、お赦してください。せめて、裸なりとも隠させてください」

ニナは泣いて懇願しましたが、返事は痛烈な鞭でした。ニナは悲鳴を上げ、それから泣きじゃくりながら、縄に曳かれて歩き始めました。

裸になるという行為は、それ自体が神様の摂理に反する行為です。裸身を他人の目に晒すなど、殿方でさえ羞恥を覚えるといいます。まして、ニナは未婚の乙女。もしも選択が

許されるなら、裸で引き回されるよりは着衣のまま首を切られるほうを選ぶでしょう。

その、死にもまさる恥辱の光景を眺めていて、私は胸がふさがりました。同情でも憐憫でもありません。ニナの拘束された裸身、数条の鞭痕に彩られた裸身。それを美しいと思ったのです。

あらかじめ布告されていたので、道筋には大勢の見物人が集まっていました。罪人の引き回しには付き物の野次も飛ばず、彼ら（数は少ないですが、女性も居ました）は固唾を呑んで、ニナの裸身を見つめています。無数の視線に突き刺されて、ニナの全身が薄桃色に染まっていきます。

それが、いっそう美しく見えました。私も、あんなふう引き回されてみたい。自分がそう思っていることに、不意に気づきました。もちろん、伯爵令嬢たる私は——お父様が謀反を企ててもしない限りは、そんな目に遭わされることはないでしょうけれど。

街を一周したニナは、広場で晒し者にされました。

処刑台上には二本の柱が立てられています。そこへ木枷が載せられて、太い釘で打ち付けられました。ニナは、上体を不自然に折り曲げた姿勢です。さらに、両脚を無理強いに開かせられて、柱の根元に縛り付けられました。滑稽なほど後ろに突き出されたお尻。重みで垂れ下がった乳房。

そして。羞恥の根源をかりうじて隠していた布片すら剥ぎ取られたのです。女にとって、これ以上は無い辱め。けれどそれは、処罰の下準備でしかなかったのです。

彼女には、五十発の鞭が与えられました。お尻や背中はもちろん、下から掬い上げるようにして乳房も打ち据えられました。どころか。真後ろから鞭を跳ね上げて、股間まで打たれたのです。

手加減はされていたのでしょう。肌に赤い条痕は刻まれるものの、派手な音の割には、肌が裂けて流血したりはしませんでした。それでも、ニナは大声で泣き叫びました。

わたしは、もうニナから目を離せませんでした。いいえ。あそこに磔けられているのが自分だったらと——そんな妄想に耽っていたのです。

鞭打ちが終わった後も、ニナは赦されません。処刑台の四隅を守っていた兵隊が、これ見よがしに散っていきます。

「これより一週間、この女を晒し者にする。隣れんで水や食べ物を与えても、あるいは他の事をして、咎めたりはせぬ。また、夜に篝火は焚かぬ」

兵士長が大声で布令しました。ざわめきが見物人の間に広がります。夜陰に紛れて良からぬことをしても咎めない。いえ、良からぬことをしろと、けしかけているも同然です。

「一週間後になお、この女が生きていれば、広場の片隅に小屋を設けて住まわせるものとする。五十銅貨を払えば、誰でも小屋を訪れて構わぬ」

当時、私はすでに子を産める年齢でした。男女がひとつ寝台で何をするか、およその知識としては知っています。つまり、そういうことです。それにしても——千アルゲは五十万ラーメです。お母様の宝石を償うには、一万回以上のそういうことをしなければならぬのです。衣食住の費えを考えれば、何万回になることでしょう。ひと晩に何回くらい、女はそういうことを受け入れられるのかまでは知りませんが、十回としても十年以上です。

十年以上も、最下級の娼婦、いえ奴隷として扱われる。それを思うと、腰の奥が疼いてしまいました。

——家に戻っても、妖しい興奮は続いていました。それをどう処理して良いものか、見当もつかないまま夜になって。腰のもやもやをなんとかしたいと思って、両脚を突っ張り腿を引き締めたのです。

「あっ……?!」

声が出てしまいました。もやもやしている、もうちょっと上のあたりに稲妻が奔ったのです。神様の怒りではありません。もっと繊細で甘美な……これまでに感じたことのない純粋な快感でした。二度三度と繰り返してみました。同じように稲妻が奔ります。だんだん太くなって。

これはどういうことなのでしょう。私は、はしたなくも寝間着の中に手を入れて、稲

妻が奔ったと思しき個所を探ってみました。

そうして、見付けてしまったのです。女の子の割れ目が上端で閉じ合わさっているあたりに、小さな疣のようなものがありました。そこに指を触れると、もっともっと太くて甘美な稲妻が奔ります。雷鳴が轟きます。

私は好奇心と快感とに任せて、その疣をいろんなふうに弄りました。小さな疣の中には、もっと小さな実核があります。それが皮膚に包まれているのです。皮だけを摘まむと、きゅるんと実核が動きます。

「ああっ……ああああっ……?!」

本能的に、これは貪ってはいけない快感だと悟りました。声を殺すために、敷布を咥えました。そして、さらに弄ります。

弄っているうちに、硬く尖ってきます。皮を剥き下げると実核が露出します。それを直接に触ると……甘美な稲妻と同時に、鋭い痛みが奔りました。でも、それが薬味となって、さらに快楽が増すのです。

弄っているうちに、それでも物足りなくなつて。胸につかえている感情もどうにかしたくて——左手で乳首も弄っていました。そこにも稲妻が奔ります。

股間の疣から発する稲妻が背筋^{せすじ}を駆け登って、乳首から乳房全体に広がる稲妻とひとつになって……

「むううっ……んんん！」

身体が宙に投げ出されたような感覚。私は、幼い絶頂を知ったのです。

——翌朝。私は満ち足りた目覚めを迎えました。と同時に、昨夜の所業は背徳に通じるのではないかという惧れも生じました。

できれば共犯者を作りたいという心理と。こんな気持ち良いことを独り占めにしてはいけないという気持ちと。なんとなく疎遠な妹と仲良くなりたいという想いと。それらが緋い合わさって。妹のベルタに教えてあげたのです。

「ふうん。じゃあ、今夜にでも確かめてみようかな」

無邪気な返事でした。無邪気過ぎて——このことをお継母様（ベルタにとっては産みの母親です）に告げたのです。

「エレナ！　なんという恥知らずな行ないに耽っているのですか」

お継母様はこれまでに見せたことのない形相で、私を叱りました。後ろにはベルタを連れていきます。さらに、私の侍女のジーナとエルザも呼び付けました。

「おまえのしたことは、神様の教えに背くことです。厳しく罰さねばなりません」

お継母様は、私に衣服をすべて、下着まで含めて脱ぐように命令なさいました。

独りで裸になるのさえ恥ずかしいのに、継母様と妹、さらに侍女の眼の前で……

「お継母様、ごめんなさい。もうけっして神様の教えに背いたりはしません。赦してください」

ぱしん！

お継母様は、手に持ってらした乗馬鞭で、私が前で組み合わせていた手をお叩きになりました。ごく軽い叩き方でしたし、婦人用の軽い乗馬鞭です。でも、この十三年間で初めて叩かれたのです。

私は驚愕とともに、お継母様の怒り、己れが犯した罪の重さに打ちひしがれました。私は、おろおろしながら衣服を自分の手で脱ぐしかありませんでした。侍女も手伝ってはくれません。

「まあ、もう生えているのね。色気づくのも無理はないわね」

前の年の初めに初潮を迎えていましたが、下腹部の産毛が次第に縮れてきたのは、もっと前からです。髪の色と同じ淡い金色ですが、それでも肌に紛れたりはしません。それはそれで羞ずかしいことでもあり、いつでも結婚できる身体になったのだという誇らしさもありません。

お継母様の言葉で、昨夜の悪戯は男女の交わりと、どこかでつながっているのだと知りました。

お継母様は、私を寝台に仰臥させて、脚を開くように命じられました。

いくらなんでも、そんなはしたない真似は出来ません。赦してくださいと懇願すると、二人の侍女に命じて、私の脚を強引に開かせました。私付きの侍女でもコルレアーニ家の奉公人であることに変わりはありません。そして、お屋敷内の一切は女主人が取り仕切って、お父様でも滅多なことでは口を差し挟みません。

お継母様は寝台の横に立って、乗馬鞭の先で私の股間を――疣の部分をつつきます。

「ふん。おまえのこれは大きいね。淫乱の証拠だわ」

罵られているのに、鞭の先は冷たくて硬いのに、稲妻が奔ってしまいます。声は抑えても、腰がひくつきます。

「こんな目に遭っても、まだ淫らなことを考えているのね。反省なさい！」

声と同時に鞭が引かれて、股間に打ち下ろされました。

ひゅっ、パシン！

「きゃあああっ……！」

神様の怒りの稲妻です。股間を真っ二つに切り裂かれたような鋭い痛みでした。

「あううう……」

でも。痛みが薄れるにつれて、腰の奥に甘い痺れが湧いてきました。

ひゅっ、パシン！

「きゃあああっ……！」

ひゅんっ、バッチイン！

「いぎゃあああっ！」

それまでの二発とは比べ物にならない強い打撃に、私は絶叫していました。

お継母様は、冷ややかに私を見下ろしています。

「これで、少しは懲りたことでしょう」

その場は赦してもらえましたが、お仕置はそれで終わりではありませんでした。

その日から、朝から晩まで、必ず侍女のひとりが私の部屋で待機――実は監視するように取り計らわれました。そして夜も。寝ているときに悪戯が出来ないようにと、両手を布

団の上に出して、手首を絹の手巾で括られたのです。

でも、禁止されればされるほど、いけないことをしてみたくくなります。それに……妹の
見ている眼の前で、全裸にされて侍女に押さえ付けられて、お継母様に鞭打たれるなんて、
ニナほどではないにしても屈辱です。鞭の痛みを追って湧いてくる甘美は、自分でする
悪戯よりも、毒を含んでいるだけに濃厚です。

三日ほどはいい子にしていましたけれど。手巾で括られているだけですから、その気に
なればほどけます。でも、自分で結ぶのは難しいです。

両手が自由なまま寝ているところを侍女に見つかってしまい、今度は五発の鞭でした。
手首は縄で縛られるようになりました。

それでも。手を縛られたままだ、寝間着の下に（両手もろともに）入れられます。細
かな指遣いは難しくても、刺激はできます。もどかしさが、むしろ薬味にもなりました。

これも、あっさりと見破られました。お継母様に指先の臭いを嗅がれたのです。

鞭は七発でした。ひと打ちごとが、前よりも厳しいものでした。私は泣き叫びましたが、
これまでとは違って、悪戯をやめるとは誓いませんでした。絶対にやめられないと悟った
からです。

そうして、とうとう……両手を広げた頭の上で鉄枷につながれてしまいました。

でも、まだ脚が残っています。最初に快感を感じたときのように、両脚を突っ張って腿
をこすり合わせて。指で弄るような深い快感は得られませんが、軽く宙に浮くくらいにま
ではなります。

これも、数日で発覚しました。腰布に、言い逃れようのない染みが着いているのですか
ら。

お継母様は、乗馬鞭をお使いになりませんでした。細い木の枝で、私の股間を打ち据え
たのです。乗馬鞭より痛くないと不満に思ったのですが、とんでもない考え違いでした。
乗馬鞭の先端は馬の肌を傷付けないように配慮されていますが、木の枝にはそんな工夫が
ありません。鋭く尖った先端は股間の疣を切り裂き（は、しませんでした）割れ目の奥

にまで届きました。

そんなことが繰り返されて——半年ほどで、全裸を寝台で“X”字形に磔けられるという、今の形に落ち着いたのです。これでは、さすがに何も出来ません。昼間に、同じ部屋で見張っている侍女の目を盗んで、ほんのちょっとだけ指で弄って、それで我慢するしかありません。

ですけど。自分で自分を弄って快感を得たいのか、それをお継母様に見つかって厳しくお仕置されて激痛とその後が続く（指で弄るよりもささやかですけど、胸の奥に沁み込みます）快感を得たいのか、どちらなのか分からなくなっていました。というのも——半年前にお継母様が聖エウフェミア女子修道院にひと月ほど滞在されていたときは、悪戯をしたいという欲求は、そんなに起こらなかったのです。

聖エウフェミア女子修道院というのは、同じ名前の修道会が王都の近郊に持つ唯一の小さな施設ですが、王族や諸侯の庇護を受けています。お継母様は、そこの出身です。もちろん、修道女がいきなり結婚はできませんから、還俗してクリスタロ侯爵の養女となつてから、お父様と結婚なさったのです。

お継母様がいわば里帰りされたのは、お父様の名代として、何かの式典に参列なさるため——ということになっていますが、そうではなかったのだらうと推測しています。

お継母様は、私を修道院へ入れようとなさっているのです。こんな淫らな娘は、どこへ嫁いでも伯爵家の名を貶める。ベルタの嫁ぎ先のブロンゾ子爵家に聞こえでもしたら破談になりかねないと——面と向かって私に言い放つのです。

まともな貴族の娘なら、十代の半ばで結婚するのが普通です。なのに、私には婚約者すら居ないのです。お継母様のせいです。

お継母様の思い通りになんかなりたくないです。修道院だなんて、絶対に厭です。清貧な生活に甘んじるのは構いませんが、神様の花嫁なんて真っ平です。だって、神様は生身の女性を肉体的に可愛がってはくさいませんから。

それくらいなら、お父様より年上どころか私の年齢の四倍もある（半世紀近い隔たりで

す) お爺様や、私の体重の三倍もある醜男と政略結婚させられるほうが、悲惨なだけに、私は悲劇の主人公でいられます。あ、数字が具体的なのは——そういう人物が実在しているからです。

誘拐と凌辱と

まだ漠然としていたし、お父様が反対なさっていた、私の修道院入りが具体的になってきました。妹が嫁ぐ前に、家庭内の醜聞を消しておきたいということでしょう。

醜聞。自身で認めたくはありませんが、そうなのでしょう。お付きの侍女ばかりか妹までが、私を蔑んだ目で見るのです。本来なら、私が妹を蔑んでも不思議ではないのに。

だって、わずか一歳しか変わらないのです。お母様が産褥で苦しんでらっしゃるときに、お父様は浮気をなさっていたのです。それでも、私はお父様を愛し、お継母様を敬い、妹を可愛がってきたのです。

過去のことは措いておきます。

私の修道院入りが本決まりになると、なんと妹が私に嫉妬するようになったのです。

私は家柄からすれば、ゆくゆくは修道院長になれるでしょう。女性は聖職に就けませんから正式には寮長ですが、修道女の頂点に立つという意味では、実質的な修道院長です。

清貧を旨として世俗を超越しているのが修道院ですが、王室の庇護を受けているとなると、それなりの格があります。ベルタの嫁ぎ先のブロンゾ子爵家なんか、足元にも及びません。それが悔しいらしいのです。

それなら、私と入れ替わってよ——そう叫びたかったです。

ですがベルタも、母親にたしなめられて納得したようです。どころか、私を姉として立ててくれるようになりました。

突然の変貌に驚きましたが、使用人の口から家庭内の不和が噂に立って、それが子爵家に伝わるのを懸念したのかもしれませんが。きっと、そうです。

ですから、妹は子爵家に招待されたとき、お継母様の反対を押し切ってまで、私をいざなったのです。姉想いの妹を装いたいのでしょう。あまり気乗りはしませんでしたけれど。お父様もお継母様も反対なさるので、私はそれに反発して、妹の申し出を受けました。

ラメーズ領からブロンゾ領まで早馬を乗り継げば半日でも、女が馬車で行けば朝に発って翌日の夕方まで掛かります。私と妹はそれぞれの馬車に侍女を一人ずつ伴なって、護衛の兵士は形ばかりに四人。私的な訪問ですし野盗の類も跳梁していませんから、こんなものでしょう。

途中の村で一泊して、翌朝に困ったことが起きました。私の馭者が急病になったのです。代わりの者を村人から雇い、侍女のジーナを看病に残して出発しました。

馬車の中には私ひとり。まったくの独りで手足も自由だなんて、半年ぶりです。でもさすがに、いけない遊びをする気にはなれません。

村を発って二時間くらいでしょうか。馬車は森の中へ入って行きました。子爵領への道筋など知れませんから、不審にも思いませんでした。

しばらくすると、馬車が止まりました。休息なら兵士が告げるはずですし、道がふさがれているなら馭者と兵士が対処するはずです。ところが、何の気配也没有。

いえ……不意に、馬車の扉が引き開けられました。無精髭の塊のような顔が、そこにありました。

「へっ、居た居た」

「この女で間違いないのかよ？」

もっと若い、もう少しは見目の良い男が、無精髭の後ろに居ました。

「さあな。似顔絵を見てるわけじゃねえし」

無精髭に腕を掴まれて、馬車から引きずり降ろされました。凶悪な顔つきの男どもが、私を取り囲みます。五人も居ます。

私は救いを求めて馬車を振り返りましたが、馭者台は空っぽでした。妹の馬車も護衛の兵士も見当たりません。

「なあ、お嬢ちゃんよ」

無精髭が馴れ馴れしい口調で話し掛けます。

「俺たちや、この馬車に乗っている娘を殺すって仕事を請け負ってるんだがな」

妹が仕組んだ罠だ。とっさに、そう考えました。家族の汚点を消し去り、姉が自分より偉くなることも防げます。

恐怖に胸が握り潰されそうです。でも、その手の力が緩みました。

「おめえが聞き分けを良くしてくれりゃあ、命は取らないでいてやるぜ？」

身代金？

いえ、違います。「聞き分け」という言葉が鍵です。

私は無我夢中で、こくこくと頷いていました。こんな薄汚い野盗どもに純潔を穢されるのも、でぶの醜男の妻にされるのも、大した違いはありません。それで命が助かるのなら。

いえ……そんな諦めの念だけではないのです。こんな薄汚い凶悪な暴漢どもに……どうせ、五人みんなに犯されるに決まっています。なんて残酷で惨めな運命でしょう。胸が締め付けられます。腰の奥が切なくなってきました。

「それじゃ、聞き分けのいいところで、おべべを脱いじゃくれねえか」

「……？」

無理矢理に引き千切られるものと期待、言い間違えました、覚悟していたのに。

「こいつは上等なおべべだから、これにも負けない稼ぎになるのさ」

言いながら、無精髭は私の胸元に手を伸ばします。

後ずさったのですが、がっしりした胸板に突き当たって、そのまま羽交い締めになれました。首飾りを箸り取られました。

「お手を拝借」

指輪もです。

「さて。いよいよ、おべべの番だぜ」

羽交い締めからは解放されましたが。男たちに取り囲まれて、みずからの手で衣服を脱ぎ捨てるなんて、肌を晒すなんて……淑女に出来ることではありません。いえ。素裸を晒されて引き回されたいなんて妄想していた淫乱娘でも、そんな事態は望みません。衣服は引き裂かれ剥ぎ取られるものです。

でも、現実には……男どもの要求を拒否すれば、殺されるかもしれません。私を犯すつもりなのでしょうから、殺したりはしない。その可能性に命を掛けるなんて、馬鹿げています。

私は指を震わせながら、上着を脱ぎに掛かりました。羞恥ではなく恐怖です。上着を脱ぎ、旅行用の野暮ったい裳裾も落としました。

「これで、よろしいでしょ」

「阿呆か、てめえは。脱げつつたら、素っ裸になれってことだよ」

そんなことは分かっています。私が全裸を暴漢どもの前に晒したいなんて思っていないと、それを彼らに示して、自分にも言い聞かせただけです。

私は無精髭に威されて絹の下着を脱ぎました。

「へえ、こりや面白え趣向じゃねえか」

股間隠しの三角布を指差されて、私は初めて激しい羞恥を覚えました。娼売女が男を誘惑するための下着。お継母様は、そうおっしゃっていました。淑女が身に着けるものではありません。

「おぼこい顔しながら、まさか男狂いとかじゃねえだろうな」

「そのほうが面倒が無くていいぜ」

野次が飛んで、男どもが野卑に嗤います。

「兄貴、極上の寝台を用意しやしたぜ」

いつの間にか、馬車の座席が壊されて、引きずり出されています。

「おお、気が利くじゃねえか。では、お嬢様。あそこに寝んねしていただきましょう」

今度は淑女振りませんでした。素直に仰臥して、両手で顔を覆いました。乙女が初めて殿方に抱かれるときの作法だと……誰が教えてくれたのか、思い出せません。侍女のどちらか——ではないと、それだけは確言できますけれど。

「へっ、処女の真似事がいい」

寝台代わりの座席が、微かに軋みました。無精髭の吐息が手の甲に吹き付けます。

お行儀が悪いのですが、指を広げて様子をうかがいました。

驚きました。

男女が媾合うとは、男性の股間にある肉の棒（男根と言うそうです）を女性の割れ目の中へ挿れることだという知識はあります。小さな頃からそういうことに興味があったので、奉公人たちのおしゃべりを盗み聞きして得た知識です。

立ち小便をしているところも見ることがあります。でも、私に覆いかぶさっている男の股間にぶら下がって、いえ屹立しているそれとは、まるきり様子が違いました。こちらのほうが何倍も太くて長いのです。あんな凶悪な怪物が私の中に挿入できるとは思えません。

男の指が、私の割れ目をまさぐります。

「痛うっ……」

割れ目の奥の穴を穿たれました。指でも痛いですが、ぎちぎちにきついです。なのに……

「濡れてやがる。手間が省けるぜ」

無精髭は右手で男根の根元を支えて、強引に押し込んできました。

「痛い痛いっ！」

叫んでしまいました。股間が真っ二つに引き裂かれたような鋭い激痛です。びきびきつと、肉の裂ける音が聞こえたように思いました。

「へええ。生娘だったのかな。にしちゃあ、たいした濡れ具合だったぜ」

なおも、男は奥深くまで突き挿れてきます。めりめりみしみしと、肉が軋みます。

「痛い痛い痛い……赦して！」

訴えるうちに、胸の奥に熱くうねくるような感情が込み上げてきました。まさに今、私

は圧倒的な暴力に組み伏せられ蹂躪され凌辱されているのです。処刑台上のニナと同じ目に遭わされているのです。

男は私の懇願など無視して、男根を突き挿れては半ばまで抜き、またすぐに奥深くまで突き挿れます。さらに、両手で私の乳房を鷲掴みにして、体重をのし掛けながら乱暴に揉みしだきます。ふだんなら悲鳴を上げていたでしょうが、股間の激痛に比べれば、我慢できるくらいの痛みでしかありません。

男は私の上で何度も何十度も弾んで——不意に動きを止めました。

男の体重が消えて。ずぬううっと、男根が引きぬかれました。血にまみれています。私の股間もです。

「へええ。やっぱり初めてだったんかい。初夜権の行使ってやつだな。どこかの領主様になったみたいでいい気分だぜ」

意味が分かりません。けれど、どうでもいいことです。

「ほら、起きろよ」

無精髭の後ろにいた、ちょっと見目麗しい若い男が、肩を抱き腕を引っ張って、私を起こしてくれました。けれど、それは親切心からではなかったのです。

「それじゃ、俺っちも初物をいただくとするか」

下半身を丸裸になって、まるで空飛ぶ鳥を狙う弓矢のように上向いた男根を私の唇にこすり付けました。

あわてて顔をそむけます。髪を掴んで正面を向かされました。

「おめえの可愛いお口で、こいつをしゃぶってくれよ」

「……?!」

驚きのあまりに声も出ません。女が小水を出したり血を流す穴に、男が小水を出す棒を突っ込む。それは、なんとなく辻褄が合っているようにも思えますが……そんな不潔なものをしゃぶるだなんて。

「そら、口を開ける。殺されたいのか」

言葉だけではありません。男は腹帯に差していた短剣を抜いて、頬を叩きました。

「……………」

観念して、私は口を薄く開けました。

ぐぼっと、男根を突っ込まれました。

「噛むんじゃねえぞ。そんなときは、これだからな」

切っ先を頬にあてがいます。顔を切られるなんて、殺されるも同じです。

「あれこれ仕込むのは、向こうさんに任せて……と。いいか。しっかり啜えてろよ。噛み付いたり吐き出そうとするんじゃないぞ」

男は短剣を鞘に戻して。両手で私の頭を抱え込むと、激しく腰を打ち付け始めました。

じゅっふ、じゅっふ、じゅっふ……

肉棒が私の口を凌辱します。喉の奥まで突き挿れられて、吐き気を催しました。男の獣臭い饅えた臭いに気分が悪くなります。

「んん……むううう……んんんっ！」

自然と呻き声が漏れます。

「もっと唇を閉じていろ。ええい、じれったい」

男は私の頭を激しく揺すりながら、腰の高さをあれこれと変えます。上顎の内側をこすられ、舌が圧迫されます。

そして、無精髭の半分くらいの時間で……

「むううううっ……！？」

喉の奥に熱い何かが叩き付けられました。反射的に、私は男を突き飛ばしていました。

「けほっ……うゑゑゑゑゑ！」

白い粘っこい何か、口から垂れました。でも、喉に絡んで、まだ残っています。

「ちっ……まあ、飲ませるのはさすがに可愛そうか」

「はあ、はあ、はあ……」

苦しんでいる私には目もくれず、男は股間を隠すとすぐに——仲間に場所を譲りました。

ああ……これから、この男に犯されるんだ。今の男と同じことをするのだろうか。それとも、普通に男女の付き合いをするのだろうか。

どちらでもありませんでした。

男は私を座席から引きずり下ろして、跪いて上体を座席に投げ出す姿勢にさせました。

背後から男がのしかかってくれば——家畜が交尾する姿そのものです。人間なのに、獣と同じ形で構合うなんて。背徳です。でも、これは私の意思ではありません。男に威されて、無理強いにさせられるのです。惨めさに、頭がぼおっとしてきました。

男の指が割れ目を抉ります。何かを搔き出すような動きです。指はすぐに抜かれて……
「ああっ……そこは?!」

指がお尻の穴に押し付けられ、周辺を乱暴にこすります。

「兄貴もジャンも初物にありついたんだ。負けちゃいられねえや」

お尻の穴に指を挿れてきました。

「いやあっ、痛い！ 汚い！」

「ぎゃあぎゃあ喚くな。汚いのは我慢してやる。痛いのが厭だったら、力を抜け」

「……………」

なんていう言いぐさでしょう。

私が言葉を失ったのを、観念したと思ったのか。男は指を抜くと、太くて熱くて軟らかいけれど硬い物を押し付けてきました。男根です。

割れ目に押し込まれたときは痛かったとはいえ、元からあった穴を広げられるような感じでしたが、これは……硬い地面に杭を力ずくで押し込むようなものです。ぐううっとお尻の穴が圧迫されていて、まわりの皮膚が引き攣れます。

そして……不意に、ぐぼっと突き抜けました。灼熱に貫かれました。処女を穢されたときは比べものにならない、耐え難い激痛です。

「いやあああっ！ やめて！ 抜いて！」

ますます奥深くまで押し入ってきます。お尻の穴が熱い痛い。お腹の中に言いようのな

い不快感が膨れ上がります。

ぱんぱんぱん……

私のお尻に男が腰を打ち付けて、その音が全身を揺さぶります。

私は涙をあふれさせながら泣き叫ぶしか出来ません。でも、あまりに惨めな思いと激痛とが入り乱れる裡に……切ない感情が込み上げてきました。腰の奥に疼きが生じました。これは……ニナの処刑を見ていたときと同じ、お継母様にお仕置していただいているときと同じです。

男が動きを止めて男根を引き抜いたときは、ほっとしたのですが、なんだか物足り……いえ、なんでもありません。

暴漢は五人居ます。私で獣欲を満たしたのは、まだ三人です。残る二人は……同時に私を貪りました。私を座席の上で四つん這いにさせて、女の穴と口に男根を突き立てたのです。

もう、傷口は裂けるだけ裂けていたのでしょう。股間にはあまり痛みを感じませんでした。それでも、下腹部に太い棒を突っ込まれるのですから、凄まじい違和感でした。そして、喉奥を突かれて生じる吐き気は最初と同じでした。

男たちは息を合わせて、私を前後に揺さぶりました。革帯で吊られた座席の無い荷車に乗せられたときよりも、ずっと気分が悪くなりました。痛みよりも不快感が強いと、胸も腰も鉛のように冷たく重たくなるのだと知りました。

五人の男どもはひどく醒めた顔つきで、全裸に暴辱の痕跡を留めたままの私を袋詰めにしたのです。

「私をどうするつもりなの。命は救ってくれるんでしょ？」

こいつらには、私を殺すつもりはない。そう思っていたのに……

「いい所へ連れてってやるよ。綺麗なおべべを着て旨い物を食って、毎晩男にチャホヤされる——地獄か天国か、そいつはおめえの心掛け次第だな」

売春窟。みずから進んで身体を売る女ばかりではない。拐かされて監禁されて脅されて、

泣きながら男に犯されている者も少なくない。そんな話を聞いたことがあります。

淫らなこと羞ずかしいことには興味津々の私でも、そんなのは願ひ下げです。

「待つて。私はラメーズ伯爵家の長女、エレナです。私を家まで送り届けてくだされば、父はじゅうぶんな報奨を出すでしょう」

「鉄の延べ板を首筋にかい」

「死んだはずの姉が生きて帰ったとなると、面白えゴタゴタが生じるだろうけどな」

「余計なことを言うんじゃない」

これで、黒幕が妹だと明白になりました。けれど、下っ端が口を挟んだような悶着は起きないと思います。妹の悪巧みは不問に付されて、私はすぐにでも修道院へ送られるでしょう。

でも、そんな内情を話す暇はありませんでした。

「ごちゃごちゃ言わずに、おとなしくしてろ。売り飛ばせば百は堅えんだ。大切に扱ってやるからよ」

暴れられては面倒と思ったのでしょう。私は縄でぐるぐる巻きにされ、口は檻褌布を詰め込まれた上から縄で縛られて、袋へ押し込められたのです。

そして、馬の背に積まれたのです。馬は常歩でゆっくりと進み始めました。それで、私は遠くへ連れ去られるのだと判断しました。というのは——速く駆けさせれば馬はすぐに疲れて、一日に進める距離はかえって短くなるのです。

それにしても、私の値段が百アルゲとは、甚だしい侮辱です。駄馬二頭分だなんて。

馬の背中は荷馬車よりも揺れます。それも単調な上下動だけではなく、左右にも傾いたりくねったり。それが、俯せにされているお腹へ直接に伝わって、先に待ち受けている運命への恐怖や不安さえ、振り落とされてしまいそうです。蹂躪された二つの穴が痛みにくくって、股間が燃えるようです。

視界をふさがれた袋の中で、痛みに耐えて上下左右に衝き動かされているうちに——売春窟での淫らで惨めな暮らしは、修道院での清貧で敬虔な生活よりは、少なくとも生き応

えがあるのではないかしらと思えてきました。悪戯をしても咎められないでしょう。お継母様のお仕置が無いのは淋しいですけど。

ずいぶんと長いこと揺すぶられて、袋から出されたときには日が暮れかけていました。疎らな林の中でしたが、目の前に小川が流れ、木々の向こうに神と悪魔の街道が見えていました。

神と悪魔というのは——平原を越え森を貫いてどこまでも続く石畳の道なんて、人間の業で造れるはずがないからです。神様の御業なら、馬車が通れないほど荒れ果てたりはしないはずです。神様が創り給い悪魔が荒らした、まさに現世の縮図です。

悪魔の申し子のような男たちは、あっという間に野宿の支度を調えました。その間、私は腰に長い縄を巻かれて小川のそばの木につながれていました。

おかげで、犯されて汚れところ（特に後ろ側）を洗い清められました。それと……ずっと我慢していた用も済ませられました。

縄は解こうと思えば出来たかもしれませんが、試みませんでした。縄を解いて見張の目を盗んで逃げたとして、どうなるでしょう。若い娘が素裸で外を歩いて、無事に済むはずがありません。それよりは、今の五人組に無事に売春窟まで連れて行ってもらうほうが安全です。

もしかしたら、独りでの放置は試しだったのかもしれませんが。というのは、それからはいくらか優しく扱ってもらえるようになったからです。

焚火を囲んでの夕食では、ずっと無精髭の横に侍らされて、胸を揉まれたり股間を指で弄られたりしました。けれど、それほど乱暴ではなく、乳首を（つねったりはせず）指の腹で転がしたり、割れ目の端の疣をくすぐったりしてくれました。お継母様のお仕置は別として、そこを他人に触れられたのは初めてでした。雲間に漂うような快感までは達しませんでした。新鮮な心地良さは、確かに感じました。

食事の後は、彼らの言い方によると「食後の腹ごなし」でした。無精髭がお尻の穴を犯して、残る四人は二人一組で「腹ごなし」をしました。あまり痛くなかったです。男女の

構合いでは、男だけでなく女も快感が得られるものらしいですが、ちっともそんなことはありませんでした。でも……暴漢どもに凌辱されているという想いは、私の胸を切なく掻きまじりました。この感情を、私は嫌いではありません。

寝るときは私だけでなく、男たちもそれぞれの袋にくるまりました。私も、また縄でぐるぐる巻きにされたうえで袋に詰められましたが、顔だけは外に出してくれました。

暴漢に凌辱されたことよりも、半日も縄で縛られて馬の背で揺られていたことで、肉体も疲れ果てていました。穢されたことへの精神的な衝撃は言うまでもありません。

私は眠りの中へと逃げ込みました。悪夢をいっぱい見たのですが、目覚めたときにはそれを忘れてしまったほど、深く昏い泥のような眠りでした。

翌日も夕暮間近まで掛けて運ばれました。もちろん、このときには顔まで袋の中です。

そして、私の望まざる旅は終わりました。常歩で一日半の道程ですから、どの方角へ移動したにせよ、まだラテリア王国内です。けれど、国内のどこなのかは、私には分かりませんでした。

娼館での生活

私は袋詰めのまま男に担がれて運ばれて、袋から出されたのは、おそらく売春窟の一室でしょう。目の前には大きな机があつて、その向こうには中年の肥えた女が座っていました。左右には、女と同じくらいの年格好の男と、これまでに私が接した殿方のうちでも片手の指で数えられるくらいの美男子が立っています。

私は床に転がされて、縄をほどかれました。上体を起こしましたが、相変わらず全裸です。両手で胸と股間を隠しました。

誰も、それを咎めませんでした。

中年の女が、執拗に私を眺めています。きっと品定めをしているのです。

「どうせ、おまえたちのこった。生娘じゃなくなってるだろうね」

「へへへ。使える穴は全部ね」

「まあ、いいさ。生娘好みの客に出すには、二つ三つ歳が行ってるからね」

私より二つ三つ下といえば、初潮はおろか下生えすら兆したばかりでしょう。そんな少女にさえ売春をさせるのだという事実には、私は衝撃を受けました。そんな幼いうちから女の穴を男根で引き裂かれるのはどんなに痛いことでしょうか。どんなに恐ろしいことでしょうか。私には、もう体験できないけれど。妹をこの場に連れてきてやりたい——そんなことを、ちらっと考えました。

「お嬢ちゃん。立ってみな」

この女の機嫌を損ねてはいけません。そう判断して、私は素直に従いました。

「その手をどけて。手持無沙汰だったら、後ろで組んでいな」

手持無沙汰ではないですが、その通りにしました。

女は、おや……といった顔をしました。羞ずかしげも無しに前を曝すなんて。そう思ったのかもしれませんが。

でも、私は必死なのです。もしも、この女のお眼鏡に適わなければ、買い取ってもらえなければ。私を持て余した五人の野盗（か山賊か知りませんが）は、私を殺すかもしれないのです。

「なかなか素直な子だね。物怖じしないのも気に入った。二百で、どうだい」

「へっへへ。そりゃ、もう」

私の背後に立っている無精髭は、声までが揉み手をしています。百と見積もっていたのが倍の値段で売れて、ほくほくなのでしょうか。それでも、馬四頭分にしか過ぎません。それはまあ……私には四頭立ての馬車を曳いて動かすなんて出来ませんけれど。

中年男が机の後ろの壁を開けて、金袋を取り出しました。机の端に銀貨を二十枚積み上げて、同じ高さの塔をさらに九個作りました。

無精髭がそれを、私を詰めていた袋に落とし込みました。銀は銅の二百倍の価値があり

ます。でも一アルゲは五百ラーメですから、銀貨は銅貨の二倍半の目方があります。それが二百枚となると、とても胴巻きでは持ち運べません。そう考えると、私の価値も捨てたものではありませんね。

無精髭たちは、私を引き渡すと早々に退散しました。これから街へ行って、私から剥ぎ取った衣類はもちろん、馬車に積んであった着替えやら宝飾類も、ことごとく売りさばくのでしょう。

「さて、と……」

女が私を見ます。

「おまえは、今日からコールス・フローレ、『踊る花の館』の踊り娘だよ。お客と踊って、気に入ってもらえたら寝台の上で可愛がってもらおうという仕事だ」

「寝台の上とは限らないがな」

「黙っといで。最初からややこしいことを言うと、この娘が混乱する」

「へいへい」

何を思ったか、中年男が女の胸を持ち上げるようにして軽く揉みました。女は悲鳴も上げず、男の手の甲をつねっただけです。

「まあ、こういったことも日常茶飯ってことさね。ああ、名乗りもしていなかったね。あたしはヘオニーナ。この館の女主人さ。ついでに紹介しとけば、この行儀の悪い男がダニオで、あたしの亭主って言えば亭主さ。この若いのはピエトロ。おまえの指導役だよ」

女は手元にあった分厚い帳面をめくりました。

「さて、おまえは……」

「私はラメーズ伯爵、マッキ・コルレアーニの長女、エレナです。どうか、使いを出してください。満足していただけるだけの褒賞を約束します」

女は私の言葉に感銘を受けた様子も見せず、帳面を眺めています。男爵や子爵といった下級貴族ではありません。伯爵令嬢なのです。庶民なら、畏れおののいて跪くのが当然なのに。

「よし、おまえはダリアにしよう。いい名前が残ってたね」

女は顔を上げると、妙なことを言いました。

「金輪際、ラメーズだの伯爵だのは忘れるんだよ。まあ、仕込まれた行儀作法や教養は存分に発揮してくれて構わないけどね」

「お願いですから、真面目に聞いてください。私は、騙されて拐わかれたのです」

ピエトロという若い男が、ずいと私の正面に迫りました。

ばしん。凄まじい平手打ちに、私はよろめきました。

「だいたい、この商売からして領主様のお目こぼしをいただいてるんだ。そこへもってきて、伯爵御令嬢様を買ったとあっちゃ、切られる首が幾つあっても足りゃしないよ」

「心配するな。首を切られたりはしねえさ。良くて火あぶり、下手をすりゃ車裂きだ」

「お黙りったら」

女は怖い目で私を睨み付けます。

「分かったね。次に伯爵とかエレナとか口にしたら、鞭を百発食らわしてから水に浸けて溺れさせて、息を吹き返したら全身を松明であぶって、それから首だけ出して土の中に埋めてやるからね」

具体的なもの、ただ殺すというより百倍も恐ろしいです。そんな残虐なことまでされてみたいとは……さすがに思いません。

「まあ、怖がらせるだけじゃ可哀想だから、先行きの希望も教えといてやるよ。おまえの買値は二百アルゲだったろ。頑張って稼いで返済すりゃあ、いつ出て行ってもいいんだからね」

出て行って、無事に帰着けたとしても、その先は修道院です。私だって、本気で解放を願ったわけではありません。こういうふうに言うておかないと、かえって変に思われるだろうと考えてのことです。

「分かりました。わたしはダリアです」

そう答えると、女は満足そうに頷きました。

「呑み込みの早い娘だね。その調子で稼いどくれ」

中年男が部屋を出て行って、入れ替わりに二十四、五くらいの女が入ってきました。

「あたいはヴィオラだよ。今日明日は、あんたの世話をしてあげる」

ついておいでと、私の手を引いて部屋から連れ出してくれました。指導役とかの若い男は、私を見送るだけでした。

連れて行かれたのは、石床の殺風景な部屋でした。壁の二面に大きな鏡が張ってあります。

あばた面の若い男が、桶を抱えて後から入って来ました。部屋にあった浅い大きな洗い桶に湯を注ぐと、すぐに引込みました。ヴィオラさんが、部屋の隅のすごく大きな桶から水を足します。

「旅の垢を落としなよ。だいいち、ちょっと臭いよ」

香水がないのですから、体臭は仕方ありません。

女主人に逆らわなかったのだから、この女に逆らう理由もありません。洗い桶に腰まで使って、渡された手拭で身体をこすります。

それにしても、驚きです。水を流しやすいように石床造りになっているこの部屋は、裸になって身体を洗うためだけの目的で設けられているようです。神様の摂理に反しています。背徳です。案外と売春窟に似つかわしい設備かもしれません。

小さな固形物を手渡されて、もうひとつ驚きました。石鹸です。伯爵家でさえ、月に三度も使うのは贅沢だというのに。しかも、獣脂ではなく花の香りがします。

「あたいたちは身体が売り物だからね。香りもアルゲのうちさ」

踊る花だなんて気障ったらしい名前を付けるのも道理だと、感心しました。身体を洗う部屋も納得です。

「そのアルゲだけだね。なんだって、あたいが因業婆あの代役を引き受けなきゃならないんだろ」

ヴィオラさんはぼやきながら、娼売の仕組を教えてくださいました。

ここは売春窟ではなく高級娼館なのだそうです。だから、余程のことが無い限り、ひと晩に相手をするのは一人の男だけだそうです。

余程のことはしょっちゅうだし、相手をするのは男に限ったことじゃないと、ヴィオラさんは溜息を吐きました。娼婦がうんざりするような事柄に興味を持つと、とんだすれっからしと思われるだろうと判断して、聞き流しておきます。

それよりも、一夜の花の値段です。なんと、五アルゲもするのだそうです。そのうち、娼館が五分の三を取って、踊り娘（私を含めた娼婦のことです）の帳面上の取り分は二アルゲですが、帳面上のと断わったのは、そこからいろんな費用が差し引かれるのです。

寝起きする部屋と調度品の賃料、日々の食費。そして日用品も出入の商人から買うのですが、街で買うよりも倍以上だとか。さらに「引退後に備えた」貯金まで天引きされます。なんだかんだで、帳面に残るのは一アルゲにもなりません。それでも職人の稼ぎよりはずっと多いのですが、前借金、私なんかはもっと露骨に買取値段には、月に五分の利息が付くのだそうです。

働き詰めでも、ひと月の稼ぎは三十アルゲ以下。実際には二十アルゲくらいでしょうか。それなのに、二百アルゲの利息が十アルゲ。元金の返済は月に十アルゲがやっとです。しかも、月の障りや病気で休めば、その間は諸費用が持ち出しになり、借金は増えていきます。その他にも、借金が増えていく仕組が幾つもあるとか。

「まあ、月の障りでも別の道具で稼ぐ娘もいるけど、あんたにや無理だね」

「そんなこと、ないです。お尻だってお口だって、したことがあります」

娼婦を相手に競っても自分を貶めるだけなのに、みずから進んで淫らな真似をしたと受け取られかねない言い方をしてしまいました。

「へええ。恐れ入ったね。とんだ阿婆擦れだ。でも、もっと楽な稼ぎ方を教えたい」

見直されたのか見下げられたのか。複雑な気分です。でも。踏み込んだら踏み込んだだけ、扉を開けてもらえるようです。

その前に——と、ヴィオラさんは娼館の仕組を詳しく教えてくれました。

来館したお客は、他のお客や複数の踊り娘とひとつになって遊びます。男女が交互に輪になって踊るのです。途中で互いにすれ違って、どんどん相手を替えていきます。気に入った踊り娘がいれば、すれ違わずに、その娘を連れて輪から抜け出します。踊り娘のほうから断われるのは、事前に予約が入っている場合だけです。脱け出したお客は踊り娘が、二階にある自分の小部屋か、別料金を払ってもらって貴賓室へ案内します。そこが、一夜限りの二人の愛の巣です。

貴賓室では二人と二人ということも稀にありますし、お客が少ないときなどは、独りで二輪も三輪も花をお買い上げくださる上得意様（ヴィオラさんは、底抜け助平の絶倫野郎と表現しました）もいらっしゃるとか。ちなみに、複数のお客で一輪だけを希望される場合は、花の値段はお客の頭数分のさらに五割増しだそうです。踊り娘の取り分は増えますが、それを喜ぶ娘はいないそうです。もしかしたら、私は例外になるかもしれません。そんな予感がします。

ここまで教えてもらったところで、私は石鹸を存分に使って、全身をきれいに洗い終わりました。

「下の手入れは……必要なさそうね」

私の股間を見て、ヴィオラさんが言いました。

「たいていの子は、もじゃ毛を手入れしてるのさ——こんな具合にね」

ヴィオラさんは裳裾をまくり腰布をずらして、見せてくれました。

「まあ……！？」

栗色の縮れ毛が、小ぢんまりとした下の尖った桃の形になっています。周辺には剃り跡が残っています。

「毛深いとチンポに巻き込んで客を怒らせるし、こっちだって自分の毛で傷付いたりするからね」

考えたこともありませんでした（当然です）。この二日間で、これまでの一生分よりもたくさん知識を得ました。

「腋毛は、あんたも剃っておいた方がいいよ」

有るべき物が有るべき所に無いと、男にはそれが扇情的に見えるのだそうです。そんなことを言われると、やってみたくになります。

「下手すると肌を切っちゃう。最初はやってあげるから、こつを覚えな」

洗い桶の中に座った私の背後から抱きつくようにして、剃ってくれました。ここでも石鹼を使って、刃の滑りを良くします。

「使った分だけ石鹼を返せとは言わないけど、剃刀は貸さないからね」

前借りをして自分用を買えと言われました。値段を聞いてびっくりしました。三度目です。小指ほどの小さな刃物のくせに、包丁よりも高価なのです。

外に出れば夫の付属物でしかない妻も、家計の財布はしっかり握っています。その権限を与えられた証が、結婚指輪です。私も、遠くない将来（と、思っていました）に備えて、銀食器の値段も包丁の値段も小麦粉の相場も把握しています。

その感覚でいえば、剃刀の値段は法外です。

これでは、どう頑張っても二百アルゲは減りそうにありません。もっとも、ここと修道院のどちらを選ぶかは、もうすこし様子を見てから決めようと思います。

腋毛を剃りながら、ヴィオラさんが続きを教えてくださいます。

すぐには踊り娘を選ばないお客も少なくないそうです。目移りがするとか、いろんな踊り娘を眺めたいというだけでもありません。すぐ近くの商都アンブラ（この言葉で、自分がどこら辺に居るか知りました）からだけではなく、絹織物の街アガータや、南方の王都から訪れる熱心なお客たちが、偶然の出会いを利用して商談とか謀略の打ち合わせをすることさえあるのだとか。

長居をしても不自由が無いように、常に豪華な料理や高いお酒が準備されています。これも別料金です。踊り娘が『おねだり』をすれば、お客は奢ってくれるそうです。後でそれなりの『見返り』は求められますけれど。料理やお酒の代金の一部は、踊り娘の取り分になるのです。美味しいものを食べられて、食費が浮くどころか余分のお金までもらえる

のですから、良いこと尽くめ——でも、ありません。

特にお酒には要注意です。ほんの少しだけなら、男は適度に助平になって扱い易いのですが、度を過ぎると踊り娘を乱暴に扱うようになるそうです。私は期待しますが。でも、もっと聞こし召すと、男根が奮起しなくなるのだそうです。その夜の花代はもらえても、そんなことを繰り返していれば、悪い評判が立って、誰にも買ってもらえなくなります。

身体の手入れが終わって、ようやく一日ぶりに衣服を身に着けました。これも、代金は前借りです。

私が逆の意味で驚いたのは、町の（あまり裕福でない）娘と変わらない服装だったことです。扇情的な三角布（だけ）の股隠しではなく、ごく普通の腰布です。

こんなので男を誘惑できるのかなと思って聞いてみたのですが、笑われました。

「そういうのはね、娼売のときに着るんだよ。人足は仕事のときにゃ半裸になるし、鍛冶屋は火除けの革前掛を着けるだろ」

言われてみれば、納得です。

身体を洗う部屋を出ると、ヴィオラさんは最初に私の部屋へ案内してくれました。小ぢんまりとしていて、小さな衣装箆箆と化粧台。そして、部屋の半分を占める大きな寝台。敷布はまっさらの亜麻布、布団は絹布に羽毛を詰め込んであります。これも娼売用。ヴィオラさんの言い方だとアルゲのうちです。

それから、大広間へ案内してもらいました。普段着の踊り娘たちが、お客を迎える準備をしています。踊ってお客に可愛がってもらうだけでなく、女中の働きもしなくてはならないのです。

ここには男手が三人しかいません。接客と用心棒と娼婦監視と雑役が二人。そのうちのひとりがピエトロさんで、もうひとりの若いほうがファンという人です。あとのひとは女将さんの旦那様です。他に料理人とかも昼間はいますが、通いです。街から遠く離れた場所にぽつんと一軒。でも、平気です。徒党を組んだ賊は、この地方には出役しません。

そして、この館には夜になると十人以上の男が深夜まで起きているのですから。

「ちょっと、集まってくれ」

ひとりずつ紹介してははだるっこしいとばかり、ヴィオラさんが皆を呼び集めました。ヴィオラさんを含めて十人です。他に、月の障りが重くて臥せっている子が二人と、怪我をして休養している子が一人居るそうです。

「ダリアと申します。若輩者ですが、どうかよろしくお引き回してくださいませ」

他に挨拶の仕方を知らないので、裳裾の端を掴んで屈膝礼をしました。

皆さん、ちょっとざわめきました。

「あんた、貴族の出かい？」

「ええと……忘れました」

きやらきやらと、皆さんが笑い転げます。

「来た早々に、良く仕込まれてるじゃないの。それとも、どっかから流れて来たのかい？」

拐われて来たのですが、そういった意味での質問ではないと思いました。

「いえ……二日前までは乙女でした」

この返答には、皆さん鼻白んだみたいでした。

「カンパニナが抜けて十三人なんてけったくそ悪い頭数にになってたところへ来てくれたんだ。歓迎するに決まってるよ」

ヴィオラさんより年配の踊り娘もいますが、彼女が姐御とかまとも役のようです。皆さんが一斉に頷きました。

そして、出自も年齢も無しに名前だけの紹介。

ローザ、ジューグリ、クリサンテ、ベゴニーナ……やはり花の名前ばかりです。

皆さんは、すぐに元の仕事に戻って。今日のところは皆の働きぶりを見ておきな——と、部屋の隅へ案内されました。椅子をあてがわれましたけれど、先輩方が立ち働いているのに座っていては横柄だと思ったので、ずっと立っていました。私をちらっと眺める目が、優しくなったように感じました。

大広間の支度が終わるとまだ明るいうちから夕食です。踊り娘だけでなく、用心棒を兼ねた男の使用人、娼館の女将であるヘオニーナさんと旦那のダニオ様も食堂に集まりました。麺麭と汁と肉と野菜。庶民の食事よりは贅沢なのでしょうが、粗悪な材料に手間も薬味も掛けないところなるという見本のような味でした。

そして、量も――踊り娘たちのお皿は、極端に小さいのです。お客に『おねだり』しなさいということでしょう。私は空腹でしたけれど、じゅうぶんになりました。というのも、先輩たちが少しずつ分けてくれたのです。きっと、『おねだり』でお腹を満たす自信があるのでしょう。

食事の間、ヘオニーナさんはしゃべり通しでした。

ローザ。ここ三日ばかり、お茶を挽いてるね。今日あたりは、もっと色っぽい衣装にしなさい。

オルテンシア。お客から苦情が来たよ。吸茎のときに手コキでごまかすんじゃない。

デアンティーナ。腋臭を何とかしなさい。

注意というかお小言ばかりです。言い返す娘もいます。

「だって、イーヴォ様もミルコ様もエルモ様も、この匂いが好きだっておっしゃってるもの。嫌なら最初から選ばなきゃいいじゃない」

デアンティーナさんが挙げた三人は上得意様のようです。女将さんのほうがやり込められました。

夕食が終わって陽が山の端に掛かって。仕事着に着替えた踊り娘たちが、大広間に三々五々と集まります。

目を見張りました。三人ほどは貴族令嬢みたいな装いをしていますが、他の皆さんは、それぞれに淫らで扇情的な衣装です。たとえば、一見すると平凡ですが、細長い布片を縫い合わせていない裳裾。歩くだけで太腿まで露わになります。踊れば、もっと上まで見えてしまうでしょう。胸割りの大きな胴着を素肌に着ている娘もいます。乳房が露出しています。

「みんな、自分で工夫したり、女将に入れ知恵されて作ってるのさ」

ヴィオラさんが教えてくれました。彼女は、貴族令嬢の装いです。ただし、裳裾の前は下の尖った桃の形に大きく割り抜かれていて、同じ形をした短い縮れ毛が見えています。お尻は三つ葉模様の割り抜きです。丸みどころか割れ目も見えています。

私？ 私は、穀物を入れる袋の底に穴をあけた物を頭からかぶって、奥の隅っこに立っています。これが、見習が大広間に出るときの衣装だそうです。お客は、声を掛けるのも禁止されています。まったく体形が分からないから、『予約』を入れる物好きもいないでしょう。袋の下の服装は自由なので、前借で買ったことになっている普段着のままです。でも、皆さんの気合の入った出で立ちを見て——明日も見習なら、きっと全裸の上から袋をかぶってやろうと心に決めました。

余談ですけど。大広間に準備されている軽食は、良い材料に手間をたっぷりと掛けてあるのが遠目にも分かりました。

踊り娘が揃った頃から、お客が来始めました。馬蹄の音、馬車の音が次々と聞こえて、一時間ほどで八人のお客が揃いました。踊り娘は十人ですから、底抜け助平の絶倫野郎が居なければ二人がお茶を挽きます。この言葉の意味も、ヴィオラさんが教えてくれました。

十八人が輪になって小一時間ほど踊って。お客と踊り娘が数人ずつに固まって、おしゃべりと軽食です。今夜のところは、商談とか謀議は聞こえてきません。遠くまで聞こえるような声で密議をするはずもないでしょうけれど。

それも約束事なのでしょう。ちらちらと見はするけれど、私に近づくお客は一人もいません。

半時間ほどしてから、二回目の踊り。三組が輪から抜けて二階へ行きました。三回目の踊りで、また三組。最後まで残った二人のお客は、「どれにしようかな」といった感じで、適当に踊り娘を選びました。

ぽんと肩を叩かれて。いつの間にか、私の指導役とかいう美男子のピエトロさんが後ろに立っていたのに気づきました。

「これから、けっして声を出すなよ」

私の手を引いて大広間の裏側へ連れて行きました。何本かの梯子が立っています。穀物袋を脱いで、ピエトロさんにお尻を押し上げられながら梯子を登りました。

ピエトロさんは私のすぐ下に立って、身体を密着させて、目の前の壁を横にずらしました。小窓です。私の頭を壁に押し付けます。小窓の向こうは、貴賓室なのでしょう。小窓には紗が掛かっていますが、中は壁掛角灯で照らされているので、男女の姿がはっきりと見えます。

ピエトロさんも顔を寄せてきて、私と並んで覗き見です。

室内の二人は、抱き合って接吻をしています。殿方は特にこれといった特徴のない、とにかく裕福そうな身なりです。踊り娘はベゴニーナさんのようです。絵画でしか見たことのない、ギリシャふうの衣装です。一枚の白い布を身体に巻いて、右肩で結んでいます。左肩も両腕も剥き出しです。布は幅が足りなくて、太腿の半ばまで露出しています。

その短か過ぎる裳裾を殿方がめくり上げて、お尻を丸出しにして、両手で撫で始めました。ベゴニアさんは身を委ねています。どころか、お尻をくねらせ片足を踏み込んで、股間を殿方の腿に押し付けました。こういう仕草もアルゲのうちなのでしょう。

殿方の手が肩の結び目をほどくと、布は床に落ちて、私よりもはるかに熟した女の裸身が現われました。娼売女が身に着けるとお継母様が言っていた逆三角形の布ではなく、ベゴニアさんは包帯のように幅の狭い腰布を二重三重に巻いています。股間がほとんど丸出しですから、隠すための布ではなく、殿方を扇るための装飾です。

ベゴニアさんが、ずっと身を離しました。かいいいしく（それとも、淫らに？）殿方の衣装を脱がせては、丁寧に衣装箱へ納めていきます。

ふたりとも腰布一枚の姿になると、寝台にもつれ込みました。

へええ……？

ベゴニアさんは殿方を仰臥させると、彼を跨いで膝立ちになりました。男女の位置が逆転しています。下から見上げられれば肝心の部分は隠せていないし、そのままでも構合い

の妨げにはなりません。それでもベゴニアさんは、殿方の眼の前で、最後の布片を取りました。彼女の股間は、薄い下生えがひとつまみ分だけです。

そこに伸ばされた手を、邪険ともいえる感じで払い除けて——まるで男が女の乳房を舐めるみたいに、胸にかぶりついて舌を這わせます。

こんな調子で手順を延々と追っているのは先に進みませんので端折りますけど。ベゴニアさんが男の腰布を剥ぎ取って男根を頬張った(!)のは、半時間は経ってからでした。

ベゴニアさんは上下逆さになって股間を殿方の顔に押し付けて。殿方はベゴニアさんのお尻を抱え込んで、股間に接吻しました。いえ、舐めたり吸ったり、舌でつついたりしています。

そうして。ベゴニアさんが下になって殿方が覆いかぶさったのは、一時間も経ってからのことでした。

二人の嬉合いも延々と続きました。男がヘコヘコガシガシと女を突いて射精して、ハイお仕舞いではないのです。途中で女を二つ折りにして両脚を肩にかついたり。上体を起こして女も引き起こして“V”字形になってみたり。互い違いに横向きになって、勃起した男根を押し下げながら挿入してみたり。

こんなにもいろんな形があるのですねと、感心するしかありません。

二人は、ただ黙々と『体操』をしているわけではありません。殿方のほうは、飢えた狼のようにベゴニアさんを食っています。凶暴と恍惚を綯い交ぜにしたような表情です。そしてベゴニアさんは……

「ああああっ、いいいいいい！」

「いやよ……こんなのため。おかしくなっちゃう……！」

「やだ、やめて……そこ、もっとつよく……」

厭とかやめたと口走りながら、自分から腰を押し付けて揺すり、お尻をくねらせています。女の穴に男根を突っ込まれているのではなく、男根を梃子にして、汲めども尽きぬ泉を掻い掘りしているように見えました。

「あああつ……いいよおお。くる、おっきいなみがくるううう！」

ベゴニアさんが男の上でのけぞりました。逆さになった顔が、こちらを向きました。向こうからは見えないはずなのに——はっきりと、私に向かって舌を突き出しました。

くくっと、ピエトロさんが声を殺して笑いました。

そうか。ベゴニアさんは知っていたのです。そして、すごく気持ち良いという演技をしていたのです。

ピエトロさんが、肩を叩いて促します。私は腰を支えてもらいながら、梯子を下りました。

改めて階段を上がって。連れ込まれたのは、私に宛てがわれた部屋です。来客用の椅子も無いので、促されるままに、寝台に並んで腰掛けました。たったこれだけの間にも、私は淑女にあるまじき行ないを重ねています。

まず、自室へ殿方を入れたこと。しかも寝室です。そして、殿方と事もあろうに寝台に並んで腰掛けるなんて。たった数時間で、もう娼館の色に染まった——のではなくて。五人の暴漢どもに繰り返し穢されたことで、私の貞操観念は崩壊してしまったのでしょう。もっとも。腰布一枚どころか素裸で街中を引き回されたいなんて妄想をするくらいですから、貞操観念なんて元からあったかどうか怪しいのですけれど。

「まあ、商売妓なんてあんなものさ」

ピエトロさんは、馴れ馴れしく私の腰を抱いて話し掛けます。

「本気で気を遣ってちゃ身体が保たない。とはいえ『あれ』が嫌いじゃあ、やってけない。ところで……おまえは気を遣ったことはねえよな？」

私はちょっとだけ迷いましたが、首を横に振りました。ベゴニアさんののは演技だとしても、女性が構合いでほんとうに気持ち良くなると、ああいうふうになるのでしょう。暴漢どもに犯されているときはもちろんですが、自分で悪戯をしているときの雲間に漂うような快感も、あれにはまるきり及びないと思います。

「まあ、そうだよな。けど、絶頂を知らんことには演技も出来ないぜ」

なるほどとは思いますが、一朝一夕に体験できる……ものだと、ピエトロさんは思っているようです。

「だから、俺が教えてやるよ」

肩を抱かれて引き寄せられ、唇を重ねられました。なにしろ、男根までしゃぶらされたのです。接吻くらいでは動じません。でも、考えてみれば。これが、私の初接吻です。普通の女の子が辿るとの順序が反対です。なんて皮肉な感慨に浸っている暇はありません。

歯を割って、舌が挿し込まれてきました。

「むうう……」

口の中を舐め回し、舌に舌を絡めてきます。後で教わったのですが、こういうときは女のほうからも同じように返すのだそうです。でも今は、されるがままの受身一方です。

さわさわっと、乳房に——くすぐったいけれど焦れたいような心地良さが広がりました。衣服の上から乳房を撫でられているのです。掌でこするだけでなく、指が円を描いたり爪で引っ掻いたりしています。とても優しいというだけではありません。衣擦れが繊細な刺激となって、官能を燃え上がらせます。剥き出しの乳房を驚掴みにされるのとは、まるきり違います。もどかしい快感が、さざ波のように乳房から全身へと広がっていきます。

ピエトロさんが、ようやく唇を離して。右手が隣の乳房へ移ります。左手はお腹を縦にくすぐりながら下へと動いて。当然に触れてくるだろうと予期していた箇所は二本の指で両脇をなぞって通り過ぎて。指の腹と手の甲を巧みに使って左右の内腿を同時に撫でます。

膝から鼠径部までを繰り返して撫でられ、左右の乳房を交互に揉まれているうちに、全身がさざ波でざわめき、それがだんだん強くなっていきます。胸が切なくなったり、腰の奥がきゅんと捻じれるのとは、まったく異なる、純粋な肉体の快感です。

それが延々と続いて。ようやくピエトロさんが私の衣服に手を掛けたときは、早く脱がされて肌に直接触れてもらいたくて、自分から身体を動かして協力しました。腰布まで一気に取り去られました。

寝台に仰向けに優しく押し倒されます。まだ腰掛けたままのピエトロさんが、身体をひ

ねって両手を私の裸身に伸ばします。

「あああつ……」

双つの乳房を掌に包まれた途端、もどかしさ無しの甘いうねりが背筋を奔りました。すうっと指がつぼまって乳首を摘まむと、もっと大きな声が出てしまいます。

「こりゃあ……連中に輪姦^{まわ}される前から、独り遊びをしていたな」

そんなことまで分かってしまうのでしょうか。

「いけない娘だ。たっぷりとお仕置をしてやるぜ」

その言葉で、お継母様を思い出しました。でもピエトロさんの『お仕置』は、ずいぶんと違いました。二本の指を女の穴に挿れながら、親指で女の疣をこすりました。

「あああああつ……」

もっともっと大きな声が出ます。でも、疣から親指が離れて。二本の指で女の穴をいろいろと刺激されても、声は出ません。

指が抜き差しされて、中で捻じられて、折り曲げて内側をくすぐられて——これも快感なのかしらと疑問符を付けたくなるような感覚が奔るだけです。

「芽を弄ってくれる客は少ない。そんな小っちゃな釦があると知らない男も多いからな」

今はたっぷり鳴かせてやるけど、仕事のときはこっそり自分で弄れと、ピエトロさんが教えてくれます。

「知らない客に教えるこたあねえぞ」

ベゴニアさんのように感極まる（演技をする）素人女は少ない。だから、うちが繁盛する。女中に手を出して、それで満足するようになられちゃ娼売あがったりだ。

「それに、おまえだって——夜毎に逝かされてちゃ、身が保たないぜ」

独り遊びで宙に浮かぶのは、毎晩でも平気どころか、そうしたいです。でも、たしかに……ベゴニアさんの乱れつぷりを演技ではなくほんとうに体験するとなると、ピエトロさんの言う通りかもしれません。

「ほんとはな。穴で逝くほうが、ずっと深くて凄まじいんだが、女に成り立てのおまえを

そこまで追い込むのは、さすがに俺でも無理だ。今夜のところは、こっちで逝かせてやるよ」

ピエトロさんの言う『芽』とは、私が疣と呼んでいた部分です。こちらのほうが可愛らしく聞こえます。

ピエトロさんはその芽を莢ごと摘まんで、くにゅくにゅとしごきます。自分で同じことをする何倍も太くて甘い稲妻が、腰を貫きます。

「あっ、あっ、あっ……」

喘ぎながら、声が甘ったるく蕩けていきます。身体がじわじわと宙に浮いていきます。「可愛い声で鳴くじゃねえか。俺様ともあろう者が、小娘の喘ぎっぷりに興奮しちゃったぜ。ほら……」

私の手を取って、股間に導きます。焼けるように熱くて弾力性に富んだ鉄の棒が、指に触れました。握らせます。

男根を握ったのは、これが初めてです。

「俺も気持ち良くしてくれよ」

ピエトロさんの手に導かれて、男根をこすります。

「そうだ、うまいぞ。ただし……ここからさらに膨れかけたら、手を放すんだぞ。おまえのここに出してもらわんことにゃ、仕事にならねえ。男ってのは、出した途端に聖人君子になっちゃうんだ」

ああ、そうでした。娼婦としての実技指導を受けているのです。

「その点、女はいいよな。何度逝ったって不死鳥のごとく甦るんだから」

まずは殺してやるぜ。そう言ってピエトロさんは（ようやく）私にのしかかってきました。

ずぶうううっと、一気に奥底まで貫かれました。

「ああっ……?!」

はっきりと、快感がありました。犯されて快感を得たのは、これが初めてです。でも、

芽を弄られる快感には遠く及びません。挿挿が始まると、ピエトロさんはどんどん気持ち良くなっていくみたいなのに、私は高まりません。

「自分で弄るんだよ」

ピエトロさんの手が、私の手をふたりの結合している部分に導きます。

「包皮を剥いて、摘まんでみろ」

莖を剥き下げて、先端をそっと摘まみました。

「よし……こうするぜ」

ピエトロさんがいっそう腰を突き出してきて、私の手に下腹部を押し付けました。そのまま、ぐいぐいと男根を押し込んでいきます。私の手は自然と押されて、芽を握ね繰り返します。それだけでなく、ピエトロさんの縮れ毛が芽をこすります。

「あああっ……あんんん！」

太くて甘い稲妻が立て続けに奔ります。女の芽から女の穴の奥へ突き抜け……ずに、背中を駆け上がります。

「そらよ、逝け……逝っちまえ」

がしがしと挿挿しながら、腰を左右にも振ります。私の手もその動きを追って……女の芽は強風の中の木の葉みたいに吹き飛ばされそうです。でも、自分で摘まんでいるので、加減できます。

強風に吹かれて、私はどんどん宙高く昇っていきます。そうして。いっそう強い稲妻に貫かれた刹那、その高みから……一気に奈落へ落ち込んだのか、さらに高く噴き上げられたのか。身体全体が爆発したようになりました。

「あああああっ……怖い！」

叫んで。全身が木っ端微塵になりました。

ピエトロさんが動きを止めて、身体を離しました。

暴漢どもに犯されたときは、すぐに次の男がのしかかるか、私を裏返しにするか、とにかく次々と襲い掛かってきたのですが。今はピエトロさんひとりです。私に身体を密着さ

せるようにして、寝台に腰掛けて。身体を――乳房でも割れ目でもないあちこちを、優しく撫でてくれます。ひと撫でごとに、木っ端微塵になった私の肉体が、寝台の上に振り積もっていった――じきに、元の形になりました。とても甘ったるい気分です。

でも。薬味が利いていないという不満がありました。お菓子にだって肉桂を入れます。その不満に気づいたとき。ニナが裸で引き回されている場面が頭に浮かびました。お継母さまが乗馬鞭を私の股間に突き付けている場面も重なりました。そして、五人の暴漢どもの顔も……

薬味への欲求は、その場限りのことでした。これ以上の見習は不要と、ピエトロさんが女将さんに進言して、翌日からは他の踊り娘たちといっしょに娼売をさせられたのです。何もかもが初めてですから、大変でした。でも、伯爵令嬢だった頃には絶対に出来なかった破廉恥なこともみずから望んでしてのけて、あけすけに言ってしまうと嬉しかったです。

だって……あんなに気持ち良くなれるのですから、修道院での暮らしなんか真っ平です。踊り娘、いえ娼婦として頑張ろうと、一夜のうちに心を決めていました。

破廉恥なことのひとつに、衣装があります。基本的には自前ですが、私のような新人にはお仕着せが用意されています。侍女のお仕着せと似ていますが、背中が上から下まで切り取られていて、紐で結ぶようになっていますから、見事に素肌が露出します。

「賃料はひと晩五十ラメ。破いたりしたら、一アルゲで買い取りだからね」

法外な値段です。それで、思いつきました。

「前掛だけなら幾らでしょうか」

女将さんは変な顔をしましたけれど。ちょっと考えてから、

「二十と二百かね。言っとくけど、今の野暮ったい服の上に着けても駄目だよ」

私は黙って、その野暮ったい服を脱ぎました。そうして、小さな腰布だけの素肌にエプロンを着けたのです。胸当も付いていますから、前はしっかりと隠せます。後ろは、お仕着せと大して変わりません。脹脛が剥き出しなのと、横からはおそらく乳首まで見えてし

もうという違いはありますけれど。

女将さんが、ぽかんと口を開けて。それから小さく笑いました。

「まったく、なんて娘だろうね。素っ裸よりも卑猥に見えるよ」

褒め言葉のようです。他の衣装はしばらく要らないだろうと言って、値引きして百ラメ、お仕着せの二日分の賃料で買い取らせてもらえました。

私は得意な気分になって、どうせだからと、股隠しの三角布も省略して、娼婦としての目見得に望みました。

先輩たちも、きゃらきゃら笑いながら褒めてくれました。そこまでは良かったのですが。

舞踏会（？）が始まってすぐのことでした。三人目のお客様が私の腕を取って、踊りの輪から抜けたのです。

弦楽器が戸惑ったように止まりました。

「フェルモ様。今宵はジグリにご予約をされていたはずですけど？」

女将さんが、お客様（と、私）の前を遮りました。

「彼女の花代は持つ。そして、この少女には十アルゲを出そうじゃないか」

女将さんの顔が綻びました。私が倍の値段で売れて、ジグリさんも別のお客様に買い上げられるでしょう。今日は踊り娘とお客様とが、ぴったり同数です。つまり、女将さんもジグリさんも、もちろん私も倍の稼ぎになります。

お客様を二階へ案内するのも踊り娘の役目ですが、彼は勝手知ったる様子で、逆に私を貴賓室へ連れ込みました。

昨夜に見学したベゴニアさんの仕事ぶりを思い出して、私はお客様が部屋の扉を閉めるなり、抱きついて接吻をしました。けれど、やんわりと押し戻されました。

「きみのような稚い少女が、娼婦の真似事をするんじゃない」

真似事ではなく、私は娼婦なのです。それに、稚いだなんて。妹でさえ、じきにお嫁に行くのです。

「ほら、脚が震えているじゃないか」

ほんとうでした。どころか、全身がかちかちです。五人の男どもに犯されて、ピエトロさんにも抱かれて、すっかり慣れたつもりでいたのに。男女の構合いと身体を売ることとの間には、大きな隔たりがあるのです。犯されることとの間にさえも。

「こんな淫らな格好をさせられて可哀想に。優しくしてあげる。僕に身を委ねなさい」

自分で考えた装いですが、それを言うと彼を失望させるだろうと直感しました。

お客様はごこちない動きで私を抱き締めました。背骨が折れるんじゃないかと思ったり、強い力です。なにが優しいものですか。でも、お客様のなさることには逆らってはいけなと、女将さんにもヴィオラさんにも繰り返し言われているので、我慢しました。そういうときは別料金を『おねだり』しろと、ヴィオラさんに入れ知恵されていたけれど、ただ抱き締められるだけで、そこまで図々しくもなれません。

お客様は私を寝台に腰掛けさせておいて、ご自分で衣服を脱ぎました。そして、私を着衣(?)のままで、ものすごく優しく押し倒したのです。

お客様は、何も知らない初心な小娘を優しく犯すという幻想に浸っている——のでしょう。それがお客様のお望みなら、叶えてあげるのが娼婦の努めだと思います。

難しいことはありません。三日前の私なら……いえ、やっぱり難しいです。きっと、これから犯されるんだと、うきうきわくわくしたことでしょう。だって、五人に拐われたときだって。そういう気持ちが髪の毛一筋ほどもなかったと言えば実は嘘になります。

どういうふうにすれば良いか分からなくなったので、両手で顔を覆って、ただじっとしていました。

前掛の裾をめくって、お客様が股間に指を這わせました。ピエトロさんのような繊細さと真反対で、強い力でぐりぐりと周辺をこすってから——ずぶっと指を挿れてきました。

素裸も同然の姿を見知らぬ男性の前に晒して、しかも無防備に横たわる。妹のベルタだったら、確実に気を失っているような淫らな振舞で、私の女の穴は濡れていました。ので、指をたやすく受け挿れました。

お客様は指で小さな円を描いているみたいです。穴の縁があちこちに引っ張られます。

ちょっと痛いですが、乱暴に扱われていると思うと、ますます濡れてしまいます。

「処女も同然だと女将は言っておったが……ふむむ。拙者の指遣いには、敵せぬと見えるな」

衣服のてきぱきとした脱ぎ方と、この言葉遣い。軍人でしょうか。それとも、惜しげもなく二十アルゲを払える財力は大商人でしょうか。客の身元を詮索するくらいに、私は冷静です。ピエトロさんにされたときのようなさざ波は立ちません。稲妻は言うに及ばずです。

お客様がのしかかってきました。じわじわと押し入ってきます。優しさのつもりでしょうが、まったく物足りません。根元まで挿入すれば下腹部が密着しますが、そうならないうちから、抜き差しを始めました。これもゆっくりです。

「もうちょっと速く動いてもいいかな？」

顔を覆ったまま、小さく頷きましたけど。そういうことは、聞くべきではないと思います。女性の反応から察するか——好き勝手に暴れまわってくださっても、私なら一向にかまいません。

お客様が、ちょっとではなく、これまでの六人（暴漢どもとピエトロさんです）の誰よりも早く腰を動かし始めました。でも、三つか四つ呼吸するくらいの間だけです。そこで動きをぴたりと止めて。名残惜しそうな風情で抜き去りました。

私を引き起こしてから、寝台の縁に腰掛けました。

「僕を椅子に見立てて、上に座りなさい」

はあい、すとん。では、初心な小娘らしくないので、おずおずと動きます。お客様は私の腰を掴んで、まったく萎えていない男根の上に導きます。ああ、そうか。こういうつながり方もあるのですね。

太腿の上にお尻が乗るので、根元までは挿入できません。腰を上下に揺すぶられるので、それに合わせて動くと、簡単にすっぽ抜けてしまいます。それをまた挿入されると、穴が広げられたり縮んだり。ちょっぴり気持ち良いです。

この形はしばらく続きました。それから、向かい合って。椅子に後ろ向きに座る要領で、また結合します。こっちのほうが、奥まで届きます。お客様の首にしがみついて動けるので、脚も疲れません。女の芽に縮れ毛がこすれてかなり気持ち良いです。それで、自分から刺激を求めて積極的に身体を揺すり始めると——すぐに突き放されました。初心な娘らしくないから好まないというのではなく、射精しそうになったからだと思います。

これまでのわずか（なのか豊富なのか）な体験から考えると、聖人君子になってから、また野獣に戻るには時間を要するらしいです。それよりは、延々と愉しみたいということでしょう。

「喉が渴いたな。冷たい酒をもらおう」

私は、寝台の脇にある小卓に伏せてある呼び鈴を鳴らしました。すぐに男の使用人がやって来て、お客様の望みを叶えてくれます。ああ、ベゴニアさんのような大声が部屋の外まで聞こえないように、壁も扉も分厚くなっています。それでも小さな鈴の音で使用人が飛んで来るのは、呼び鈴は天井から紐で吊るされていて、使用人の控室につながっているからです。

それと。男の使用人と言いましたが、それは女将さんやお客様にとってのことです。私たち娼婦にとっては、雑用をしてくれる便利な人というだけではなく、たいていの狼藉は大目に見られる娼館でも一線を超えたお客様をたしなめてくれる頼もしい存在であり、私たちに落ち度があつた場合は男の強い力でお仕置をする怖い人でもあります。ということも、ピエトロさんや先輩のお姉さんたちから教わりました。

お酒を飲んで。私もすこしお付き合いをして。葡萄酒くらいは飲みつけていますけれど、冷やした蒸留酒なんて初めてです。これまでに述べてきたのとは別の意味で、頭がぼわんとなってしまうしました。

ので。初心な小娘らしくない振舞もしてしまいました。最初は、私が羞ずかしがるのを期待して、そうさせたのでしょうけれど。お客様と向かい合って馬乗りになったときは、暴れ馬を馭すように腰を跳ねさせながら自分の手で芽や乳首を激しく弄ってしまいました。

さいわいに、お客様はそれも悦んでくださいました。

「稚い娘がこうも乱れるとは……僕の魔羅もたいしたものだな」

お客様が聖人君子になっている間に、浴室（身体を洗うための部屋のことです）へ行きます。女の穴の奥に挿れていた海綿を指でほじくり出して、奥まで酢で洗います。こうすると、百のうち九十九までは赤ちゃんが出来ないのだそうです。実際には、十数人のうち生理が二か月以上も止まってしまう娘は年に一人か二人だそうですから、千のうち九百九十九よりも確実です。不幸にして『失敗』したら、産婆さんと呼んで処置をしてもらいます。公になれば罰せられますから、馬一頭よりも高額を支払わされます。もちろん、その娘の借金になります。

酢で洗った後は水で洗って臭いを消して、新しい海綿を詰めます。部屋の中を衝立で仕切って（仕切らせずに見物される悪趣味なお客様もいらっしゃるのか）処置をしても良いのですが、浴室なら石鹸で体を洗って芳香を肌にまとうことができます。香水よりも殿方を奮起させられるそうです。こういった真似は素人女には出来ないというか、そもそもそういう発想がありません。

そして、部屋へ戻ったときには（お客様が精力的であれば）、聖人君子が野獣に変貌しています。

私をお買い上げくださったお客様も聖人君子になったり野獣に復活したり。夜半までに三度も奮起してくださいました。後は私を抱き枕にして、ぐっすりとお眠りになりました。

私は、就寝のときに手足が自由なのにはまだ慣れていなかったのも、お客様に抱き着いて眠りました。

翌朝、お客様を（まだ、裸に前掛けの衣装で）見送ったあと、ヴィオラさんに軽くたしなめられました。

「あんた、ジグリの客を横取りしたでしょ」

「でも、あれはお客様が……」

「そうだとすると、ジグリにしては同じことなの」

たとえ二人分の稼ぎがあっても、そういう問題ではない。ぼつと出の小娘に馴染み客を奪われたとあっては、彼女の自尊心の問題だそうです。

「それでは……たとえば、私の花代をジグリスさんに付けてもらうとかでは、駄目でしょうね」

「お金の問題じゃないんだからね」

どうすれば良いかは自分で考えろと言われました。薄情だなんて思いません。まったく考えていなかったジグリスさんの気持ちを教えてくれたのですから、感謝です。

新入りが先輩たちに嫌われたらどうなるか、侍女の入れ替わりを見てきたから分かります。とにかく謝って、それ以上のことはその場で考えましょう。

ジグリスさんは一見のお客様を相手に、宵のうちに仕事を済ませて、今はまだ眠っています。半時間おきくらいに様子をうかがって、目が覚めて身支度も終わった頃合いを見計らって、部屋を訪れました。

「昨夜はごめんなさい」

率直に謝ったのですが、かえって気分を害したみたいです。

「なんで、あんたが謝るのさ。誰を選ぶかは、客が決めることだよ」

「でも、予約を横取りしてしまっ。私がジグリスさんの立場だったら、お客よりもあなたを恨めしく思うでしょう。ほんとうに、ごめんなさい」

「へええ。若いのに、なかなか気が回るじゃないの。いいってことさ。客を棚上げしてあんたを恨むほど、あいつに未練があるわけでもないしね」

言葉だけの謝罪では、実がありません。考えておいた提案をします。

「あの……ジグリスさんが、どうしても厭なお客様が来られたときは、言ってください。私が選ばれるようにします」

「どうやって？ 選ぶのは客だよ」

「ええと……そのお客様が隣に来られるときに、わざと身体を密着させたりとか、つないでいる手を握りしめたりとか……」

貴族令嬢として殿方を誘惑するときは、もっと間接的で優雅な振舞をしますが、娼婦なら、肉体的な振舞が良いと思います。

「はっ……そんなんじゃ駄目だよ」

ジグリスさんは馬鹿にしたように笑いましたが、なんとなく情味が感じられました。

「ここは身体を売り買いする場所さ。だからこそ、女から情を向けられると、たいがいの男はほだされちまうのさ」

それには、男の瞳を見つめるのが良いと、教えてくれました。それも凝視ではなく、男の瞳のずっと遠くを眺める感じで。そうすると『恋する目つき』になるのだそうです。

「あんたもしたたかだね。秘訣ってほどじゃないけど、あたしから手管を聞き出すなんてさ」

「そんなつもりじゃなかったです。ジグリスさんの良い人には、絶対にそんな仕草はしません」

「ばあか。そんな男が居るわきゃねえだろ」

それで、お仕舞いです。それ以来、ジグリスさんとは仲良しになりました。歳が十ちかく離れていますから、妹分でしょうか。

こうして、私の娼婦生活が始まったのです。お客様に仕込まれたり、お姉さんたちに教わったりして、殿方を肉体的に悦ばすいろんな遣り方やつながり方を覚えていきました。

ですけれど、私自身を悦ばせてくださるお客様は、いらっしやいませんでした。ピエトロさんが教えてくれた通りです。とにかくご自分が気持ち良くなることしか考えていません。私が反応を示さないでいると、腰をいっそう激しく雑に動かします。

教会が認めている男女の構合い方は、女性が仰向けになって男性が組み敷く形だけです。私を最初にお買い上げくださったフェルモ様みたいに、あれこれと形を変えるお客様は、あまりいらっしやいません。そうすると、お客様の両手はご自分の身体を支えるためにふさがりますから、私の身体を弄ってくださいません。つながる前に揉んだりさすったりは

してくださいますが、ピエトロさんのように繊細で官能を掻き立てるような触り方ではありません。いっそ、乱暴に乳房を驚掴みにされたほうが、ずっとましです。

娼婦が演技をするのがいけないのだと思いますけれど。そうしないと「あの娘は不感症だ」とか噂が立って、お茶を挽く晩ばかりになるそうです。フェルモ様がお望みだったような、何も知らない稚い初心な娘を装ってもみましたが、不興を買ってしまいました。

ひと晩の享楽に五アルゲ、いえ、馬車台とか『おねだり』の別料金を加えれば十アルゲも払えるお客様は、若い女中を何人も雇われています。そういうった娘たちと同じ反応を娼婦に求めているのではないのです。

もっとも。どれだけ独り遊びをしても咎められることは無いので、そういう意味では満たされています。でも、けっして自堕落な生活ではありません。上流社会の殿方を楽しませるのは、構合いだけではありません。殿方の趣味と関心に応じて、ホメロスでもフレスコ画でも政治でも、それなりに会話が出来なければなりません。それもアルゲのうちです。さいわいに、私は文字を覚えるところから始める必要はありませんでしたが、それでも勉強しなければならないことは沢山あります。といいますか、商業の仕組や政治向きの話など、貴族令嬢には必要の無かった事柄も多いのです。

ですから、娼婦としての生活は、とても刺激に満ちていました。肝心の娼売に慣れてくると、ただ面倒なだけになってしまったという根本的な問題を除いては。

——そんな退屈が吹き飛ばされたのは、娼婦生活がひと月も過ぎた頃でした。

「明晩、ブルーノ様がいらっしゃるんだけど、誰かお相手をしておくれ」

名指ししないで予約を入れるなんて、そんなこともあるんだなと、私は奇妙に思いました。もっと奇妙なのは、誰も受けようとしらないことです。花代は四倍の二十アルゲ。しかも、翌日から一週間はお客を取らなくてよいし、その期間は部屋代も食費も免除してもらえるという、夢みたいな好条件です。私もずいぶんと擦れてきましたから、好条件の裏にはとんでもない悪条件が隠れているくらいは分かります。

「どうだね、ダリア。おまえが引き受けちゃくれないか。ブルーノ様も、新人なら喜び

になるしさ」

「お母さん。何も知らない子にやらせるのは可哀想だよ」

オルテンシアさんが裳裾をまくって、太腿を見せました。細長く白い筋が何本も刻まれています。

「ブルーノってのは、女を縛って鞭打って興奮する鬼畜野郎さ。ひと月前に相手をさせられて、まだ傷が残ってるんだ」

一週間は娼売をしなくて良いのではなく、出来なくなるのだそうです。

縛られて鞭打たれる。ああ、なんて素敵なんでしょう。ひと月も傷が残るなんて、そんなに厳しく鞭打たれたことは、まだありません。

ふたつ返事では、さすがにまずいと思いましたので、ためらうそぶりはしました。けれど、女将さんが他の人に話を振る前に、引き受けると返事をしました。

「お姉さんたちが虐められているのに、私だけが逃げるのは卑怯ですから。でも……お仕事が出来ない間は、借金は増えないけれど減りもしませんね」

お金なんかどうだっていいのですが、そんな娼婦はいませんから、心配をして見せなければなりません。

「おまえも凶太くなったねえ。いいさ、費えは無しでひと晩につき二アルゲずつ出してやるよ」

実際に銀貨を手にするわけではなく、帳面の数字が減るだけです。でも、喜んで見せました。

「わあ。一週間も遊べてお給金だけもらえるなんて、夢みたい」

「後悔したって知らないよ。まあ、誰かが生贄にならなくちゃいけないんだし、これもコース・フローレでの洗礼だと思うんだね」

ヴィオラさんが、きな臭い顔でそう言いました。この人は、最初の二日間ですけど、私にいろいろと教えてくれました。私も（出自は隠した範囲で）いろいろとお話をしましたから、他の人よりは私のことをよく知っています。被虐への憧れにも気づいているかも

しません。

そして、当日の夜を迎えました。ブルーノ様は、羽振りだけでなく（面と向かって評するときには）大変に恰幅の良い中年の殿方でした。殿方と断わるのは、このひと月に二度ですが、御婦人のお客様もお迎えしているからです。

おひとりは、夫君か雇用主かは知りませんが旦那様に伴なわれた若い見目麗しい女性。もうおひと方は、仮面舞踏会でならお相手が見つかるかもしれないふくよかな年配の、ありていに言ってしまうえば小母様でした。どのような遊び方をされるのか興味津々でしたけれど、私はお買い上げいただけませんでした。

話をブルーノ様に戻します。私は、未だに前掛一枚の衣装で間に合わせています。とてもお客様の評判が良いのです。私に次いで若いカメラアさんは私と張り合って、胸当無しの前掛けでお客様の前に出ようとしたのですが、女将さんにたしなめられました。肌の露出が多すぎるということです。割れ目や縮れ毛を（裳裾に開けた小窓から）丸出しにするのは咎められないのですから、全体の比率でしょうか。女将さんの審美眼に適うかどうかでしょう。

ブルーノ様も、大層に褒めてくださいました。

「これは、いい。うちの女中たちにも、誂えてやろう」

私もブルーノ様も、踊りの輪に加わりました。でも、私を摘み取ろうとなさる方はいらっしゃいません。私たち娼婦は、それぞれの名前を表わす小さな造花を胸の谷間（私にだってあります！）に飾っているのですが、ブルーノ様もダリアを襟元に差していいらっしゃるからです。

最初の踊りの途中で、ブルーノ様は私を輪から連れ出されました。私が腕にぶら下がるようにして、貴賓室までご案内します。

部屋に入るなり、私は突き飛ばされて床に転がりました。

ブルーノ様は無言で私に襲いかかり、紐を引き千切って前掛けを剥ぎ取りました。そして寝台に引きずり上げられて——久しぶりに、胸がぎゅっと締め付けられました。腰の奥

がきゅうんと捻じられます。そこには房鞭や細長い笞が並べられていたのです。さらに、寝台の四隅からは太い縄が中央に向かって伸びています。使用人のピエトロさんかファンさんが、あらかじめ準備していたのでしょう。太腿ほどの太さがある丸太も置かれていますが、これはどんなふうに（私の身体に）使われるのか——すぐに分かりました。

丸太を腰の下に横向きに敷く形で、私は仰向けにされました。手首と足首に四本の縄が巻き付けられて、上下左右に引っ張られました。私は、うんと腰を突き上げて手足を広げた形に磔けられたのです。

ブルーノ様は私を見下ろしながら、ゆっくりと全裸になりました。ここまでひと言も発していませんが、瞳が焰のように燃えています。

ブルーノ様も寝台に上がられて。私の頭を挟んで膝立ちになりました。両手を伸ばして、私の乳首を摘まみました。そして、強い力で真上に引っ張ります。乳房が紡錘形に引き伸ばされます。

「くうっ……」

歯を食い縛るほどの痛みです。でも、悲鳴は上げません。我慢すればするほど、もっと強く引っ張ってもらえると思ったからです。でも、それは無用の配慮でした。ブルーノ様は、お継母様よりも、あの五人の暴漢どもよりも、はるかに残虐なお方なのでした。

乳首を真上に引っ張るだけでなく、左右に広げたり交差させたり、四方八方に引きずり回すのです。そして乳首を放すと、爪を立てて乳房を鷲掴みにしました。

「痛いっ……」

まだ悲鳴ではなく、せいぜい泣き言です。

「ふん……」

ブルーノ様は、乳房から手を放すと——まだ半勃起で、大きくはなっているけれどもなだれている男根を、私の唇に押し付けました。

私は、素直にそれを咥えます。でも、このひと月で仕込まれた淫技を積極的に遣おうとはしません。だって、私は虐められているのです。虐めている男に奉仕するのは不自然で

す。

「けっして噛むんじゃないぞ。ここを切り取ってやるからな」

女の芽を掘り起こして、乳首と同じように引っ張ります。酷い目に遭わされたいといつても、快樂の鉤を切り取られてはたまりません。言葉だけの脅しだとは思いますが。私はものすごく真剣に、わずかでも歯を立てないように、こくこくと頷きました。

ブルーノ様が答を手に取ります。柳の枝で作られているのでしょうか。私の小指ほどの太さがありますが、よく撓ります。ブルーノ様はまた私の乳首を引っ張り上げて。

パシン！

「もごおっ……！」

乳房の裏側を叩かれました。乳房の上に乗馬鞭を打ち下ろされるのにはお継母様で慣れています、裏側を叩かれたのは初めてです。ものすごく痛いです。

パシン、パシン、パシン、パシン！

五発叩かれました。男根を噛んだら大変なので、悲鳴は堪えました。

ブルーノ様が反対側の乳首に持ち替えて。

パシン、パシン、パシン、パシン、パシン！

同じ数だけ叩かれました。

そして。答の先がお腹を撫でていって、割れ目をつつきます。

「ふむ……雑草が邪魔だな」

ブルーノ様が立ち上がりました。喉の奥まで突っ込まれていた男根が抜き去られて、呼吸が楽になりました。ブルーノ様が角灯の硝子を開けて、蠟燭を取り出しました。どういう形で構えばそうなるのか不思議なのですが、壁にぶつかって角灯を落としても大丈夫なように、娼館の二階では油ではなくもっぱら蠟燭が使われているのです。すごい贅沢です。

ブルーノ様は太い蠟燭を持ったまま、また私を跨いで男根を咥えさせました。今度は、私の顔の真上に、ずしんと腰を落としたのです。

「んゝむゝうゝうゝっ……?!」

あわてて目を閉じました。眼球が圧迫されて、目の前が赤く染まります。それよりも、玉袋が鼻をふさいで、息が出来ません。口を大きく開けて、男根との隙間から息を吸います。

不意に、股間に熱痛を感じました。

「もゝほゝおゝっ……?!」

男女共通の蕾を貫かれたときのような錯覚ではなく、本物の灼熱です。腰がびくんと跳ねて、柔肌を丸太の樹皮が擦りました。ちりちりっと、肌の上で何かが爆ぜるような音というよりも微かな震えを感じました。

熱痛はすぐに薄れたのですが、ひと呼吸をおいて、また襲ってきました。それが繰り返されます。下生えを焼かれているのです。こんな無茶をされるのなら、腋と同じように自分で剃っておけば良かったと後悔しました。

私の草叢は、ごくささやかなものです。たちまち燃やし尽くされてしまいました。

それなのに、蠟燭は私の肌の上から去りません。

「もゝおゝおゝっ……むゝうゝうゝ……」

割れ目の真上から熱蠟を垂らされました。お腹を上がってきて……乳房にも垂らされます。乳房を掴まれて、乳首にも直撃です。そのたびに、私は大きな呻き声を上げます。叫びたいのですが、男根を噛まないように呻き声で我慢しているのです。歯を食い縛れば少しは楽になるのですが、それは絶対に出来ません。

すでに女の急所は蠟で覆われ尽くされたのでしょう。おへそや内腿にまで熱蠟が垂らされていきます。そうして……股間に太い灼熱が突っ込まれたのです！

「いゝぎゝゃあゝあゝあゝあゝっ……！」

私は絶叫しました。口を大きく開けすぎて、玉袋まで咥え込んでしまいました。

「まゝあゝあゝ……あゝあゝ、あゝあゝ……」

顎が外れそうなくらいに口を開けたまま、私は泣き続けました。非道が過ぎます。女の

道具を焼かれたら、一週間くらいの休養では足りません。いえ、火傷がきれいに治るかさえ怪しいです。

私のくぐもった悲鳴に満足したのか、ブルーノ様が腰を上下に揺すり始めました。茹でた腸詰くらいに柔らかい男根が、口を蹂躪し、喉に突き刺さります。

「むうう、うう……むううう……」

こんな姿勢で喉の奥に射精されたら、むせてしまいます。嚙んでしまいます。それを恐れたのですが、射精の兆候も無く、えんえんと抽挿が続きます。

そして。あまり硬くならないまま、ぐぐうっと竿が膨れたなと感じた瞬間。腰の動きが止まりました。夜は長いのです。そして、お歳を召されてくると、聖人君子から獣に復活するまで時間が掛かります。それを嫌って、出し惜しみをしたのです。

ブルーノ様の指が、穴を穿ちました。さかんに動かしています。指を挿れられて拡張を感じたのですから、太い蠟燭は穴の中に埋没しているのでしょうか。ブルーノ様は何本も指を突っ込んで、どうにか蠟燭を取り出してくれました。

ですが、それは——次の責めを始めるための準備でした。

ぶゅん、ぱぱん。大きな風切り音とばらけた感じの破裂音。房鞭です。

房鞭は人間への懲罰や拷問のために考案された道具です。乗馬鞭に比べたら、さぞ痛いことでしょう。それが、火傷をした肌に叩き付けられるのです。怖いというか、叩かれたくないと本気で願いました。

ぶんっ、ばしいん！

「まゝあゝあゝっ……！」

くぐもった悲鳴にしかありませんが、絶叫です。乳房が破裂したと思ったほどの激痛でした。

ぶんっ、ばしいん！

ぶんっ、ばしいん！

立て続けに激痛が破裂します。いっそのこと、思い切り嚙みついてやろうかと思いまし

た。そうすれば、女の芽を切り取られる羽目になろうとも、今は苦痛から逃れられる。そんな馬鹿な考えが浮かんだほどです。

さいわいに、それを実行する前に鞭の嵐は焉みました。ほんのひと呼吸の間だけ。

いっそう体重をのし掛けられた。そう感じたと同時に、股間で激痛が破裂しました。

ぶん、ばしん！

「も`こ`お`お`お`お`つ……！」

乳房よりも凄まじい痛みです。でも、これまでに感じたことのない太く重たい稲妻が女の芽を直撃したのです。絶対に快感ではありません。けれど、純粹な激痛かというところ、それも違います。肉体は激痛に苦しみながら、魂は悦んでいる——とでも言えばよいのでしょうか。

ぶん、ばしん！

ぶん、ばしん！

ぶうん、ばっちゃあん！

不意打ちに、太腿を横に叩かれました。明らかに音が違っていました。そうしてみると、女の急所への鞭はずいぶん手加減してくださっていたのです。手加減無しの鞭を股間に叩き込んで欲しい……とは、さすがに思いません。ほんとです。

ぶうん、ばっちゃあん！

ぶん、ばしん！

ぶうん、ばちゃん！

打つ部位ごとに強弱を付けて、全身が鞣されていきます。房鞭は四角い革紐を何本も束ねてあります。角の部分は文字通りに肌を切り裂きます。ちょっと鋭い痛みが混じるくらいですが、肌を切られているという想いが、胸を強く捻じります。

何十発になったか。ふいに鞭の嵐が焉みました。

「あ`っ……あ`んんん？」

それまでの無慈悲とは正反対の温かなそよ風が、女の芽を颯り始めました。腰にさざ波

が立って、それが大きなうねりに育っていきます。ブルーノ様は他の殿方と違って、ここにそういう突起があることを、それが女の快感の釦であることを知悉してらっしゃるようです。

ピエトロさんにも負けない繊細な指遣いで、ぐんぐん私を追い上げていきます。

「あゝんっ……あゝっ、あゝっ……」

夢中になってブルーノ様を噛んではいけないという想いが、ときどき私を正気に（ちょっぴりだけ）引き戻します。それが、足枷を嵌められて山道を追い上げられていくみたいで、もどかしいのです。それでも、次第に頂上が見えてきました。

そこで、指が芽から離れました。ブルーノ様が身じろぎします。

ぶうん、ずばっちゃあん！

「もゝおゝおゝおゝおゝっ……！」

これまでにない凄まじい一撃が股間に叩き込まれました。

私は崖の上から突き墜とされて……空中を漂い……地面に叩き付けられる前に気を失ってしまいました。

それで、ブルーノ様の『お遊び』は、お仕舞い……ではありませんでした。

息を吹き返したら、俯せに磔けられていました。でも、寝台に横向きです。顔が縁から突き出ています。ブルーノ様は寝台から降りて膝立ちになって、髪を掴んで私をのけ反らせて、また男根を咥えさせました。今度は上からではなく水平に突かれるので、そんなに苦しくはありませんでした。

その体勢で、今度はお尻の穴を虐めていただきました。快樂の釦が無い分だけ、つらかったです。燃えている蝋燭を突っ込まれたときは、女の穴みたいに滑らかには挿入できなかったもので、ずっと熱くて痛い思いをしました。でも、背中とお尻は鞭打たれても、乳房や股間ほど痛くはありませんでした。

そして最後には。私を床に跪かせて正面に立ちはだかって。どうやっても水平までしか鎌首をもたげない男根を口に挿れさせて。知っている限りの手練を尽くすようにお命じに

なりました。ようやく私は、娼婦としての面目を施した……ことに、なるのでしょうか。

だって、口の中に一回出されたきりで、最後まで女の穴はお使いにならなかったのですから。

一度の射精で満足されたブルーノ様は、私をまた仰向けの礫にされて、その上に敷布をお掛けになって。私の肉を布団にされてお眠りになりました。そして翌朝は、私をそのまま放置してお帰りになったのです。

傷に痛む身体を引きずってお見送りしなくても良いように取り計らってくださった——のかもしれませんが。

すでに昨夜のうちから医師が呼ばれていて、私はすぐに念入りの治療を受けました。私の身体を気遣ってという部分もあったでしょうけれど。皮肉な見方をすれば、高額（二百アルゲ、駄馬なら四頭は買えます）な花が値打ちを保つようにという配慮です。

肌には浅い切り傷が無数に刻まれていましたが、一週間のうちには全治する程度でしかありませんでした。燃えている蠟燭を突っ込まれた二つの穴も、ごく軽い火傷だけで済んでいました。私からは見えませんでしたが、挿入する直前に芯を揉み消してくださったのかもしれませんが。

オルテンシアさんはひと月後まで鞭痕が残ったのですから。ブルーノ様は、私には手加減してくださったのでしょう。私はオルテンシアさんよりも華奢ですから、そのせいかもしれません。最初だからと、女将さんが釘を刺してくれたのかもしれませんが。

傷の痛みに呻吟したのは一日だけで。三日目あたりからは暇を持て余すようになりました。そうしてみると。蠟燭の熱さも笞や鞭の痛さも記憶から薄れて……虐めていただいたという甘美な思い出だけが残って。昼間から独り遊びに耽って、一日に何回も雲の間に漂ったのでした。

これは余談ですが。私は、きっちり一週間の療養でお仕事に戻りました。女将さんは、それ以上の嬾惰を許してくれませんでした。

傷はすっかり治っていましたが、ひとつだけ元通りにならなかった部分があります。下

生えです。そして、お客様に不評でした。もう芽吹いていたのです。それがチクチク痛い
と、お叱りを受けました。私としては、ザラザラして新鮮な快感だったのですが、娼婦が
自身の快楽を求めてはいけません。

あらためて、すべて剃り落としました。それは、すごく好評でした。ので、それから
無毛を通しています。腋毛は最初からヴィオラさんの忠告を容れて剃っていましたから、
首から下は剥き卵みたいになりました——お客様に噛まれたり吸われたりした跡を除けば。

娼婦への折檻

驚いたことに、甘美な記憶を想い出す一方で、次第に不満が募ってきました。それは、
あれだけ熱燭で焼かれて鞭打たれて、たった数日で治ってしまう傷で済んだことです。傷
の浅い深いではなく、明らかに手加減されていたという、そこが不満なのです。

ニナのように、処罰として思い切り鞭打たれたものではありません。お継母様のように、
躰のための体罰とも違います。今にして思えば、継子虐めの部分もあったでしょうけれど、
それでも憂さ晴らしという『本気』でした。

これらに比べると、ブルーノ様の行為は、ただの『遊び』です。男の子がふざけてやる
取っ組み合いとか決闘ごっこと変わらないのではないのでしょうか。それとも、兵士たちが
している剣術の稽古。けっして真剣ではなく、相手を傷付けないように配慮しています。

そう考えてみると。私がこれまでに受けたほんとうの意味での虐待は、例の五人組に拐
わかされて犯された、ただ一件だけです。それも、女を犯すというだけで女を虐めるとい
う意図までは無かったと思います。

ほんとうに悪いことをして処罰されたい。どんなに泣き叫んでも赦してもらえず、傷が
治るまでに何週間もかかるくらいに責められてみたい。なまじ、ブルーノ様の凄まじい『遊
び』を知ってしまっただけに、それを熱望するようになったのです。

そして、それは娼館の中にあったのです。自分の鼻の下にあるものは見えないという諺の通りでした。

ブルーノ様は、あれからも月に一度の割合で『踊る花の館』へお見えになり、カメラアとジェルベラが生贄になりました。私はむしろ志願したかったくらいですが、誰もが嫌う変態的な行為を悦んで受け容れる娘とは、さすがに思われなくなかったので遠慮しました。

けれど変態的な行為は、なにも殿方が女を虐めるだけではありません。無慈悲な女主人のように振る舞ってほしいとおっしゃるお客様もいらっしゃいました。喜々として演じる先輩もいましたが、私は苦手でした。腕力でも権力でも圧倒的に優位な人を虐めるだなんて、ごっこ遊びでしかないです。もちろん、お客様はアルゲですから、内心は押し隠して求めには応じましたけれど。やはり、不熱心は態度に表われます。舞踏会の合間にそういう評判が広まって、このお遊びで私を選ぶお客様は居なくなりました。

でも、もうひとつの変態的な行為には、しばしばお呼びが掛かりました。独りで二輪も三輪も花をお買い上げくださる上得意様の中には、底抜け助平であっても絶倫野郎ではない方もいらっしゃいました。では、なぜ欲張るのかというと、花同士で媾合いの真似事をさせて、それを見物されるのです。

女同士ですから、男根はありません。両側に亀頭のある張形を使ったり、割れ目同士を擦り合わせたり、あるいは上下逆さになって互いの女性器を口で貪るのです。女の身体は女がいちばん良く知っています。張形を使わなくても、女の芽を執拗に虐めれば、存外簡単に絶頂まで追い上げられます。もっとも、年下で性技も未熟な私が、もっぱら虐められて一方的に絶頂へ追いやられることのほうが多かったですけど。これは、私も好きになりました。新人が入ってきたら、虐める側になってみたいとも思いました。

つまり私は——それなりに娼婦の生活を愉しんでいたのです。

そして、降誕祭の日を迎えたのです。神様の教えに真っ向から背く娼婦といえども、年に何回かは教会に足を運びます。降誕祭も、そのひとつです。ふだんは教会に疎遠な不心得者（私たちのことですね）も集まって来ますから、小人数に分かれていれば正体を気づ

かれることもありません。庶民もそれなりに着飾っていますから、下級貴族の夫人くらいには見える私たちの外出着（外を連れ回したいお客様からの贈り物か前借しての自前です）もあまり目立ちません。

私たちは四つの組に分かれ、女将さんと旦那さんと二人の男性使用人に引率されて教会へ行きました。途中でギブソフィラさんがはぐれて、翌朝になっても帰って来ませんでした。情人と語らって逃亡したのです。

新年になって間もなく、ギブソフィラさんは戻って来ました。正確には——遠く離れた街で情人（と思っていた下司野郎）に、ここよりもぐんと格が落ちる売春窟に売られて、みずから素性を明らかにして送り返してもらったのです。

なにしろ、ひと晩に三人も五人も客を取らされて、その中には明らかに病持ちも居たのだそうです。高価な海綿は使わせてもらえず、身籠っても臨月間際まで休ませてもらえません。それでたいいはい流れてしまいますが、不幸にして赤ちゃんが産まれたら——男児は間引き、女兒は母親に育てさせて、『おしゃぶり』とかを仕込んで母親の『手伝い』をさせるのだとか。

さいわいに、こういった商売にも非公認の同業組合があつて、娼婦の引き抜きは御法度なのです。そこへ、ギブソフィラさんは訴えたのでした。

逃亡していた間の稼ぎ分と、『踊る花の館』が先方に払った謝礼は、すべてギブソフィラさんの借金に上乗せされました。

それだけでは済まずに……

「自分から戻って来たのは殊勝だけどね。だからと言って赦すわけにやいかないよ」

私たちは十一人全員が裏庭に集められました。二人減っているのは、ラベンダさんは身請けされ、ローザさんは見事に借金を返済したばかりか小商いくらいは出来るお金を貯めて堂々と出て行ったからです。

そんな幸運に恵まれず努力をしなくても、三十五歳になったら追い出されます。借金が残っていれば娼婦の私有財産など無いはずですが、実際にはお客様からいただいた心付と

かをへそくっていたりします。それを取り上げるほど女将さんも無慈悲ではありませんけれど、身元の怪しい三十過ぎの女を雇ってくれる所など滅多にありませんから、遅かれ早かれ無一文になって——野垂れ死にするか、誰の庇護もなく街角で男の袖を引いて早晩に投獄されるか——悲惨な運命が待っています。でも、ギプソフィラさんが売られた売春窟では、三十五歳まで永らえる女は少ないそうです。

話を戻します。私たちが集められたのは、そのギプソフィラさんへの折檻を見せしめにするためです。

彼女は全裸にされ、手足をまとめて括られて木の枝から吊るされました。狩りで仕留めた狐や猪を運ぶ縛り方です。そうして彼女をぶん回しておいて、ピエトロさんとファンさんが両側から房鞭で叩くのです。

ぶんっ、バジン！

ぶんっ、バジン！

ぶんっ、バジン！

鞭が風を切る音は鋭く、肌を叩く音は短く重たいです。ブルーノさんの『お遊び』とは、まるで違います。

それなのにギプソフィラさんは低く呻くだけで、悲鳴は噛み殺しています。贖罪のためでしょうけれど、叩かれるのは背中とお尻と太腿や二の腕だけです。女の急所には鞭が届きません。

なぜ叩く部位を限っているのかは、翌々日になってから分かりました。わずか一日だけの療養で、ギプソフィラさんは娼売を再開させられたのです。抱いている娘の正面が傷だらけでは、萎えてしまう殿方も多いでしょうが、後ろなら抱き合っている最中には見えませんものね。

同時に二発ずつが二十五回。ギプソフィラさんのお尻も脇腹も背中も太腿も二の腕も、真っ赤に腫れ上がって鞭傷だらけです。でも、出血はしていません。打ち方に秘訣があるのでしょう。

鞭打ちは終わりましたが、実は懲罰の本番はここからでした。勃起した男根と同じくらい太さで長さは三倍ほどもある棒が、二本用意されました。細めの縄が棒に巻き付けられました。

「こいつはお父さんの出番だね」

娼館では娼婦たちに女将さんのことを『お母さん』と呼ばせています。娼館の外での交渉を受け持つ亭主は『お父さん』です。

「憎まれ役は、いつも俺だからな」

ぼやきながら、ダニオさんが二本の棒を両手に持って、ギブソフィラさんのお尻と向かい合います。

斜め横からなので良くは見えませんが、女の割れ目は干上がっています。ダニオさんはその下にある蕾に棒を突き刺しました。

強い力に押されてギブソフィラさんの裸身が頭のほうへ逃げて行って……不意に揺り返しました。

「きひいいっ……！」

ついにギブソフィラさんが悲鳴を上げました。ダニオさんが手を放すと、半分ほどの長さになった棒がお尻の穴から突き出ています。つまり、男根の五割増の深さまでひと息に貫かれたのです。縄を巻いた分だけ太くなっているし毛羽立っています。潤滑のない所に突き刺されるのは、その激痛を想像も出来ません。

ダニオさんが二本目の棒を本来の穴へ、これも無造作に突き刺しました。さすがに身体はあまり揺れませんでしたし、ギブソフィラさんも呻き声を上げただけでした。

ひと塊になって見守っている私たちのほうへダニオさんがギブソフィラさんのお尻を向けました。蕾は無残に捻じられて、血が滴っています。

ピエトロさんとファンさんが、水を入れた桶を運んで来ました。それを、ギブソフィラさんにぶっ掛けます。

「このまま明日の朝まで吊るしておくところだけだね。殊勝に戻って来たのに免じて、陽

が沈むまでで赦してやるよ」

真冬です。深夜には氷が張ります。凍え死んでしまいます。夕方まででも、ひどい凍傷にかかるのではないのでしょうか。

その心配はないと、じきに分かりました。二時間おきくらいに、身体を温めてもらえるのです——手加減された鞭打ちで。このときは、三角形になっている内側まで狙って鞭を当てるので、乳房もお腹も温まります。それと、少量の火酒も飲ませてもらえます。

朝まで吊るすときも、二人の使用人が交代で当番に当たるとか。ご苦労様と言いたいです。

私もギブソフィラさんと同じ折檻を受けてみたい。そう思いました。逃げて後悔して戻るとするのは、わざとらし過ぎます。逃げた動機を説明できません。そうすると、後悔する理由も無くなります。

それでも、逃げる口実を見付けたときに備えて準備だけはしておきました。『お父さん』の部屋に忍び込んで、手紙を偽造したのです。

この娘はラメーズ領のエレナである。

故郷の父親が大病に臥せたるをもって、一時の帰郷を許す也。

沿道の皆々が便宜を図ってくれることを望む。

署名欄は空白にしておきました。

いろんな事柄を勉強するために、この館の娼婦たちは文字を読めます。でも、私のように流麗な書体で書くのは無理です。王宮の書記官とかならいざ知らず、村役人風情では、この羊皮紙を偽物とは見破れないでしょう。

署名欄を埋める機会は二週間ほどで訪れました。しかも、逃げ出す恰好の口実を携えて。

アガータの街に住まう騎士様がお客に付いてくださったのです。前年の十一月に、主人のお供をしてラメーズを越えブロンゾまで行ったのをたいそう自慢なさいました。彼のご主人は、ブロンゾ子爵家の結婚式に参列し、彼もお披露目のパレードを見物したそうです。

実のところ、私としては「ああ、そうでしょう。やっぱりね」なのですが。ラメーズ伯爵第一令嬢エレナとしては、憤慨して然るべきです。

姉が賊にさらわれて行方不明という不祥事の真っ最中なのです。お祭り騒ぎに浮かれているとは言語道断です。子爵家も当然に遠慮なさるべきです。お父様もお父様です。これでは、娘を見捨てたも同然ではないですか。万難を排して魔窟から脱出し、お父様を語り妹を叱り付けねば気が収まりません。

ふう……計略を練っているうちに、ほんとうに腹が立ってきました。

私は隙を盗んで騎士様の指輪で、例の手紙に紋章を捺しました。名前を書き加えれば完成です。

近くとはいえ、ここからアガータは、ラメーズとは反対の方角です。村役人が、わざわざ手紙の真贋を問い合わせる懸念はありません。もっとも、見破られても一向に差し支えありません。素直に白状して、娼館まで護送してもらうだけです。

翌日の明け方。私は女将さんの部屋に忍び込んで、当座の物入りに充てる金箱（錠前なんか付いていません）からお金を盗みました。銅貨ばかりで銀貨は三枚きりでしたが、じゅうぶんです。というか、麴麴を贖うのに銀貨を使っては怪しまれます。

私はそのまま逃げ出しました。たまに娼館から遠出するときも数人でまとまって、しかもピエトロさんかファンさんが付き添って（監視して）いましたから、まったく土地勘はありません。後ろを振り返りながら街道を、女の足が許す限りの早足で歩きました。

最初の村で馭者を付けて荷車を借りるのは簡単でした。役人も居ない小さな村で、村長さんに手紙を見せて、夕方までに行ける村まで連れて行ってほしいとお願いして、銀貨一枚という破格の報酬を申し出ただけです。

もちろんなのですが、馬車を借りた村は娼館に近すぎました。念のためにと、村長さんが娼館に使いをやって——夕方になる前に、馬を駈けさせてきたファンさんに捕まってしまいました。

引き返すには遅すぎるからと、馬車が向かっていた村へ連行されました。首に長い鎖を

巻かれて厩に繋がれましたが、食事と寝藁と、それから……用を足すための桶も与えられました。彼も厩に泊まったのですが、私が桶を跨ぐときは外に出ていてくれました。

「おめえも馬鹿な真似をしたもんだ。女の浅知恵と足で逃げ切れるとでも思ったのかよ」

「でも、ギブソフィラさんは逃げおおせたじゃない」

「へっ。アンブラからは街道だけでも三方へ分かれてるからな。おめえみたいに一本道を逃げたのとは違わあ」

私は捕まるために逃げたのです。だから、あれこれしゃべるとぼろを出すかもしれないので、言い込められておきました。

でも、念のためにと手足を（別々に、緩く）縛られたときには、尋ねずにはいられませんでした。

「私を抱かないの？」

ピエトロさんが私を抱いたのは、娼館に売られた最初の夜だけ。ファンさんとは、一度もありません。

この世界では、男たちは商品に手を出さないのが不文律であり誇りだというのは知っています。最初のあれが、私への娼婦教育だったというのも分かっています。

でも、そういうのは味気無いと日頃から思っていました。逃げようとした悪い娼婦になら、何をしても許されると思ったのです。

ファンさんの返事は、にべも無いものでした。

「明日の折檻を手加減させようたって、無駄だぜ」

もちろん、そんなつもりはありませんでした。でも、逆の意味で期待してしまいました。私が色仕掛けを試みたと、ファンさんが告げ口をしたら——折檻はいっそう厳しくなるでしょう。本気で恐怖に怯えながら同時に、胸が切なくなりました。

その夜は何事も無く過ぎました。私は荷馬車に揺られ続けていたので、疲れと、いつにない早起きのせいとで、ぐっすりと眠れました。どんなに残酷な折檻であろうと、殺されたりはしないどころか、娼売道具を壊されることも絶対に無いという安心感も、効き目の

良い眠り薬になりました。

——そして、夜が明けて。生まれて初めて、みずから望んで受ける折檻のために、娼館まで連れ戻されるのです。

「お手々つないで帰っちゃあ、様にならねえからな」

私は縛り直された上で、穀物を入れる袋に詰められ、ファンさんの馬の背中に積まれて、娼館へ連れ戻されたのです。

着衣のままという点を除けば、五人組が私を運んだのと同じです。これが獲物を人目につかないように運ぶ常套手段なのでしょうか。それとも、あいつらの遣り口をファンさんが真似ただけなのでしょうか。そんなことに關心はありませんけれど——どうせなら素裸にされて袋に詰められずに運ばれたかったです。

娼館に着いて袋から出されたときには、陽はもう傾いていました。再び、全員が裏庭に集められています。

これまでは聞き分け良く楽しそうに働いていたのに、なぜ急に逃げ出したのかと女将さんに問い詰められたので、私は正直に（表向きの）理由を答えました。

「妹は拐われた私のことを心配もせず、皆に祝福されて子爵家に嫁ぎました。伯爵家の長女たる私は……」

「黙れ！」

金切り声で、女将さんが遮りました。

「言っておいたはずだよ。二度とそれを口にしたら、鞭を食らわして溺れさせて火で焼いて生き埋めにしてやるって」

私への折檻を見せ付けるために呼び集めた娘たちを凄い形相でねめまわしました。

「おまえたちも、今の言葉は忘れるんだよっ」

みんな、女将さんの剣幕に怯えて、声もありません。私に同情の眼差しを投げってくれるお姉さんもありますが、戸惑っているのが分かります。

ここは王国でも有数の高級娼館です。身分は明かさなくても、貴族どころか王族の雰囲気

気を漂わせたお客様さえお見えになります。そういった雲の上の殿方に一夜の愉しみを提供するのには慣れていても、その眷属が同輩、それもみそっかすとなると……どんな気持ちになるのか、私には想像できません。居心地が悪いだろうとは分かりますけれど。

いちばん平然としているのは女将さんかもしれません。

「おまえには、逃げた罰を与えるより先に、その性根を叩き直してやらないとね」

女将さんに命じられて、ピエトロさんとファンさんとが、二人がかりで私の衣服を（わざわざ短剣で）切り裂きました。服を買うのに、また借金が増えます。

「もしも、ギプソフィラへの折檻を見て、そんなに酷い目には遭わされないなんて思ってるんだとしたら、とんだ考え違いだからね」

全裸にされた私は、逆さ吊りにされました。それも脚を大きく開かされて。それだけでも股関節が軋み内腿に痙攣が奔るというのに。両腕を水平に伸ばされて木の棒に縛り付けられ、その両端に大きな石を括り付けられました。ますます股関節が痛みに引き攣ります。

真冬の戸外で全裸にされて、苦しい姿勢で逆さ磔にされる。これだけで、じゅうぶんに折檻です拷問です。寒さと恐怖とで身震いが止まりません。ことに寒さのせいでしょうか。これまでは虐められるときに必ず伴っていた、胸の切なさも腰の疼きも、まったく感じません。

ピエトロさんとファンさんが、房鞭を持って私の前後に立ちました。いえ、房鞭ではないです。細い革紐を何本も撚り合わせて何か所かに瘤を作り、その瘤からは短い針のような金属が突き出ています。これは……処罰ではなく処刑に使うという、九尾鞭ではないでしょうか。確言できないのは、あまりに残酷なのでラメーズ領では使われていないからです。

それが、私の身体に叩き付けられるのです。こんな形で吊るしたので、どこを狙われるかも明白です。

なにかがカチカチ鳴っているのに気づきました。私の歯です。さすがに、胸には鉛が詰められて、ときめきも切なさも押し潰されています。腰の奥には氷が張って炎など燃え上

がるはずありません。

それでも、私は赦しを乞いません。もしも赦されでもしたら、幻となった激痛にいつまでも想いを馳せることになるでしょう。

「それじゃ、いくぜ。逃げたおめえが悪いんだからな」

ピエトロさんが九尾鞭を真上に振りかぶりました。

ひゅんっ、ズバッチイイン！

「きゝわゝあゝあああつつっ！！」

絶叫しました。

激痛ではありません。稲妻とともに無数の刃で切り裂かれたような、鋭くて重たくて熱くて冷たい、いつまでも続く一瞬の感覚です。

背中も同時に鞭打たれて、こちらは鋭くて熱い、はっきりと激痛でした。

再びピエトロさんが鞭を構えます。あまりの恐怖に、目を閉じられません。

ひゅんっ、ズバッチイイン！

「ぎびひいいいいつつっ！！」

今度は乳房とお尻です。目の前で鮮血が飛び散りました。

ひゅんっ、ズバッチイイン！

「ぐううっ……」

両腋を打ち下ろされました。昨日の私だったら絶叫していたでしょう。でも、股間への凄絶な一撃に比べればすこしはましです。といっても、一千アルゲの借金でも二千アルゲでも、返済できないことに違いはないのです。

ひゅんっ、ズバッチイイン！

ひゅんっ、ズバッチイイン！

立て続けの二発は、お腹と背中に、浅い角度で交わる“X”字を幾つも重ねた傷を刻みました。無数の真っ赤な線刻のあちこちで、小指の先くらいの大きさで皮膚が剥ぎ取られています。

ピエトロさんが、鞭を引いて後ろに下がりました。

「九尾鞭を二人で五回ずつ。一本ずつを合計すれば九十発だ。約束の百発には足りないけど、まけておいてやるよ」

激痛に苛まれながらも、ほっとしました。こんな凶器で二人から五十回ずつも叩かれたら、絶対に死んでしまいます。

「おまえたち。朋輩が苦しんでいるんだ。手当てしてやりな」

十一人が私を取り囲みます。ピエトロさんとファンさんが、白い粉を盛った小皿をみんなに配りました。

「傷口に塩を塗っとくと結界になって、悪魔が憑りつかなくなるんだよ。だから、どんなに痛がっても全部塗り込めてやりな」

「お母さんの言葉は、ほんとうだよ。あたいは忠告を無視して鞭の傷をほっといたら、背中一面が膿んで、二週間も寝込んだんだから」

そう言うと、ヴィオラさんは右手に塩を盛って、私の股間にかぶせました。前後左右に擦ります。

「ひいひい……」

私の為を思ってしてくれているのでしょうかけれど、まるきりの拷問です。塩の粒が傷を抉ります。ぴりぴりと沁み込みます。

ヴィオラさんは塩を使い切ると、カメラアさんと替わりました。彼女は小皿を地面に置いて、両方の乳房を同時に『手当て』してくれます。入念に揉み込みます。裸に前掛けの衣装で私と張り合ったことはありますが、それがきっかけで、歳が近いこともあって、仲の良い好敵手みたいな関係になっています。だから、これは善意でしょう。私は悲鳴も呻き声も押し殺して、鋭い痛みに耐えました。

「まだるっこしいね。前と後ろと両側。四人ずつで手当てしてやりな」

女将さんが私の顔を見下ろしたまま言います。きっと、まだまだ苦痛に耐えられると判断したのです。

そうして『手当て』が終わると。最初の日に脅した言葉の通りに、私を溺れさせる支度に取り掛かりました。

私の真下に小さな桶が置かれました。縁まで水があふれています。

ピエトロさんとファンさんが息を合わせて、私を吊るしている縄を緩めていきます。私は開脚のまますこしずつ下ろされて行って……女将さんが私の髪を横へ払って。頭から水に浸かっていきます。

こんなわずかな水でも、人は溺れるのですね——などと感心している場合ではありません。赦しを乞い願うなんて無駄なことはせずに、深呼吸を繰り返して息を溜めます。

目が水面下に没して、視界がぼやけます。耳も浸かって、水音以外は何も聞こえなくなりました。鼻も水没して、つうんとします。そしてついに……口も水面下に没しました。もう、呼吸はできません。私に出来ることは、引き上げてくれるまで耐えることだけです。

何もしていないと恐怖に負けそうになるので、ゆっくりと数を数えましょう。

ひとつ、ふた一つ、みいつつ……

三十まで数えても、引き上げてもらえません。息が苦しくなってきました。頭が痛くなってきました。

さんじゅいち、さんじゅに、さんじゅなな、さんじゅうご……数えても無意味です。

眼の前が暗くなってきました。

ふっと疑念が湧きました。女将さんは、私でひと晩に三アルゲを稼いでいます。一夜に二人のお客様を取れば三アルゲずつの花代で稼ぎは四アルゲ。これまでの三か月で、とくに二百アルゲの元は取っているはずです。私の借金は四十アルゲも減っていませんけれど。

いえ、命の瀬戸際でお金の話をするつもりではありません。元を取ったと女将さんが考えているとすると……ここらで一人くらい殺して、娼婦たちに恐怖を植え付けようと、そんな恐ろしいことを目論んでいるかもしれません。

なんとか、自力で生き延びなければ。

そうだ。わずかに桶一杯の水です。四半分も飲んでしまえば、水面は口よりも下がります。

私は閉じていた口を開けて、むせないように気を付けながら、水を飲みました。逆さにされているから、喉を通ってくれるか不安でしたが、『行為は心配に克つ』という格言の通りでした。

口の半分くらいが水面から出ると、それ以上は飲むのが難しいので、できるだけ大きく口を開けて、息をしました。

「ぶはあ、はあ、はあ、ぶふっ……」

両手に広げられた腕が桶の縁につかえていますから、さらに沈められるおそれは……

ざばざばっと、水を注ぎ足されました。あわてて息を止めて口も閉じます。

今度は苦しくなる前に水を飲んで、息をして。息が整ったところで、また注ぎ足されました。女将さんも、敢えて私を殺そうとまでは考えていないようです。死んでもかまわないとは、思っているかもしれませんけれど。

女将さんが慈悲の心を持ってくれるか、私のお腹が破裂するかの根比べ——なんて悲壮なことにまではなりません。五回目に水を飲み干したら、そこで引き上げてもらえました。

咳き込んでいる私の前にピエトロさんが立ちました。私のお腹を撫でています。

「餓鬼を孕んだみてえに膨れてるぜ。可哀想になあ」

言い終わるなり、ぼすんとお腹を殴り付けました。

「うぶっ……うゝえゝえゝえゝ！」

噴水みたいな勢いで水を吐き出しました。

悶え苦しむ私の前に、枯れ枝が積まれていきます。鞭と水の次は火責めです。女将さんは全身をあぶると脅していましたが、そんなことをすれば大火傷か、悪くすると死んでしまいます。

枯れ木の山に火が着けられました。それだけでも、燻されて咳き込んでしまいます。

ピエトロさんとファンさんが、太い枝を持って私の前後に立って……

「きゃああっ……熱いっ！」

ずっと肌を擦りました。熱蛹を垂らされたほども熱くはなかったのですが、大きく燃え上がる炎は、それだけで恐怖です。

すぐには二度目がなくて……女将さんがしゃがみ込んで、私の目を覗き込みました。逆さになった女将さんの顔が、毒蛇か蝦蟇のように見えました。私が苦しんでいるのに同情の欠片も無く、面白がってもいない、冷たく瞬きををしない瞳。

「これから、おまえの娼売道具に燃えている枝を突っ込んでやるよ。蛹燭なんかと違って、根元まで熱くなってるからね」

「ゆ、赦してください……」

無駄と分かっている、哀願せずにはいられません。虐められてみたいとは、これっぽっちも思いません。

女将さんは冷酷に嗤いました。

「なに、使えなくなったりはしないさ。むしろ火傷が治ったら、中で襦がのたくって、あちこちに瘤が出来て、男殺しの名器になるよ。そうしたら、ひと晩十アルゲに値上げてやろうかね。おまえの取り分も三アルゲに上げてやるよ」

私を震え上がらせておいて、ふっと優しい声音になりました。

「赦してやっても、いいんだよ？」

「お願いします。もう、二度と逃げたりしません。お母さんの言い付けには、絶対に逆らいません！」

気紛れでもなんでも、女将さんの慈悲に取り縋りました。

「おまえは誰だい？」

今さらの問い掛け——ではないと、直感しました。返事を間違えたら、燃えている枝を女の穴に突っ込まれます。

「私は『踊る花の館』の娼婦ダリアです」

「それは踊り名だろ。本名は、何て言うんだね？」

「……忘れました！」

「へええ。それじゃ、どこ生まれなのかい？」

「それも忘れました！」

女将さんが、ようやく人間めいた笑みを浮かべました。

「客への受け答えは、ヴィオラあたりから教わるんだよ。物忘ればかりじゃ、客も鼻白むからね」

女将さんが手を振ると、ピエトロさんが焚火を踏み消しに掛りました。

「それじゃ、これで躰はお仕舞いにしてやるよ」

「ああ、ありがとうございます」

私は心の底から、女将さんに感謝しました。でも、それは早とちりでした。女将さんは、また毒蛇のような顔つきに戻って、こう言ったのです。

「それじゃ、ここからは足抜きへの処罰だよ」

「……………」

絶望の中でうなだれるしかありません。その処罰を受けたくて、捕まるに決まっている逃亡を決行したのですが。期待していたよりもずっと過酷に責められて——まったくときめきませんでした。腰に熱を帯びませんでした。

これ以上は、もう厭です。九尾鞭で切り刻まれた肌をさらに鞭打たれたら、きっと死んでしまいます。

女将さんも、それくらいは承知していたのでしょう。房鞭は免除してくれました。でも、木の枝から吊るして放置するのまでは赦してくれませんでした。どころか。鞭打ちの分まで上乘せされました。

どういうことかと言うと。

鋭い杭に踏板を釘で打ち付けた台の上に立たされて、首を吊られたのです。身体がぐらつけば、杭がだんだん地面に刺さっていつて首を締められます。台を踏み外そうものなら、

おしまいです。両手は自由なので、頭上の太い枝を掴んで腕を曲げ、身体を引き上げていれば大丈夫です。けれど……身体を引き上げ過ぎて足が浮いたりすると、踏台が倒れてしまいます。踏台にも体重を乗せなければなりません。その加減が難しいのです。しかも、ギプソフィラさんに掛けられた慈悲は無く、明日の夜明けまでです。冬の夜は長いです。桶に汲んだ水も凍ります。

一時間おきに、ピエトロさんかファンさんが身体を温めに来てくれました。房鞭で加減して全身を打つのです。九尾鞭で傷付けられたうえに凍えている肌には耐え難い痛さでしたが、それでも身体が温まって、わずかに生気が甦りました。朦朧とする意識が、しゃきっとしました。

ピエトロさんのときは、口に瓶を突っ込んで火酒を飲ませてくれましたけれど、あまり嬉しくない好意でした。酔っ払って足元がふらついては、直ちに絞首刑が執行されるのですから。

もしかすると。一時間交代で来るのですから、次の人を起こすまでは眠らずに、こっそりと私を見張ってくれているのかもしれませんが。でも、命懸けで確かめる蛮勇は持ち合わせていません。

きっとそうに違いないという希望を持ち続けながら頑張るしかないのです。

我慢できずに、何度もお漏らしをしてしまいました。その直後は脚だけでも温かくなりますが、じきに風に吹かれる以上に冷えてしまいます。

身体を支えることに意識のほとんどを集中していましたが、それでもいろんな考えが頭をよぎりました。

もしも選べるとしても……修道女ではなく娼婦を望むでしょう。

群衆の侮蔑を浴びながら、街中を全裸で引き回されてみたいです。こんなに寒くも痛くもつらくもなく……私は羞恥に全身を火照らせることでしょう。胸は炎に灼かれ、腰は熔岩のごとく煮え滾るでしょう。

私は、痛みや寒さには弱いのでしょうか。そんなはずはありません。乳房を握り潰され

女の割れ目を鞭打たれても、激痛の奥に甘美を覚えていたのですから。寝台に裸で磔けられて、わずか毛布一枚で真冬の寒さに耐えるだけでなく敷布に染みを作っていたのですから。

それとも。これはさすがに度を越しているという、それだけなのでしょう。少量なら料理の味付けに欠かせない塩も、口いっぱい頬張ると苦くて辛いだけなのと同じように。

そんなことも、火酒の酔いと真冬の寒気と積み重なる疲労、手足の痺れ——全身の衰弱で考えられなくなって……

それでも、私は生きて夜明けを迎えたのでした。

伯爵家の搜索

それからまるまる一か月間が療養に充てられました。というか、お仕事をさせてもらえませんでした。そして復帰後の最初に付いたお客様が、あのブルーノ様でした。

今度は趣向を変えて、そんなに豊満でもない私の乳房を無理矢理に革紐で縛って縊り出して、それに長い針を刺したり（片方に三本までで乳首は禁止と、事前に本人の前で女将さんと取り決めていました）、部屋の端から端まで腰の高さに張った縄に束子とか針金を巻き付けて、それを私に跨がせて歩かせるといった『遊び』でした。今度はちゃんと女の穴を使っていたきました。

それで、また一週間の静養です。この一週間はひと晩二アルゲの休業補償がもらえました。

私が臥せっている間に、二人の新人が加わりました。デージェスとマルゲリータ、教養のある人なら名前から察せられるように姉妹です。前借りの金額つまり買取値は、二人で百三十アルゲだそうです。そうしてみると、私の二百アルゲは貴族令嬢という希少価値を評価されてのものかもしれません。お客様には口をつぐんでいなければなりません、自

然と滲み出る教養や礼儀作法はその娼婦の値打ちを高めます。元は高貴な身分の娘を抱くことに優越を感じるお客様は、少なくないことでしょう。

姉のデイジェスは私のひとつ上。妹のほうは、女将さんが言うところの、生娘に拘る殿方が好む年齢です。初潮も発毛も迎えていますけれど。私だって、この子なら花と花との絡み合いで虐める側になってみたいと思ったほど可愛らしいです。

二人とも処女でしたので、お目見得は踊りの輪ではなく、『水揚げ』の競売になりました。デイジェスは十二アルゲと、せいぜい二夜分の花代に色を着けた程度でしたが、マルゲリータは三十アルゲもの高値で落札されました。もっとも、四割のはずの本人の取り分は、使い物にならないくらい敷布を血で汚したと難癖を付けられて半分にされましたけど。

そしてマルゲリータはひと月もしないうちに、私が虐めてあげる暇も無く、例のブルーノ様に落籍されたのです。なんでも四百アルゲだったとか。

女将さんは笑いが止まらないでしょうけれど、哀れな少女は夜毎に泣き叫ぶ境遇に墮とされたのです。買い主様の性欲がお歳相応であることを祈るばかりですが、それは期待薄かもしれません。いずれにせよ、ブルーノ様は娼館へお越しにならなくなりました。

私としては、同情からではなく羨望から、マルゲリータちゃんと代わってあげたいです。

ちょっと娼婦を虐めたり張形を使うお客様はいらっしゃいますが、ブルーノ様ほど鬼畜な変態紳士はいらっしゃいません。

退屈です。悪漢に拐われて売り飛ばされて、強制的に身体を売られているのですから、悲劇の伯爵令嬢なのですから、それを想えば幾らかは慰めになります。

けれど。私がダリアと名付けられて半年も経った頃、こんな快楽的微温湯的刹那的な生活に、新たな波乱の兆しが差したのです。

アガータから来られたお客様が、私にお尋ねになったのです。

「ダリアちゃん。きみ、まさかラメーズ伯爵の身内じゃないよね？」

あんな無慈悲な折檻は、二度と御免です。

「お嬢様付きの侍女の友達のお兄さんの隣に住んでいる娘が、たしか又従姉妹だったかし

ら」

ヴィオラさんに教わったはぐらかし方です。

「でも、どうしてそんなことを聞くの？」

お客様の話を聞いて、いろいろと呆れましたし、胸騒ぎもしました。

旅の商人ふうの男から、行方不明になった妹を探していると、似顔絵を見せられたのだそうです。

「金髪以外は似てねえと思ったけど、あらためて良っく見ると……まあ、そんなおべべじやあなあ」

顔なんか二の次で、胸とお尻ばかりを見ているんだぜと、助平っぽく笑いました。

常連様のご要望で、寒さが緩んでからは、また前掛だけの衣装に戻しているのです。それはともかく。

「でも変ね。あそこはご長男でも十四のはずよ」

「ばあか。ご令嬢失踪たら、王国を揺るがす醜聞だぜ。てめえも探し人も偽名を使うに決まってるだろ。ところが、旅外套の留め飾りが紋章入りときてやがる」

お屋敷勤めの薄のろ下っ端だろうな。街のならず者あたりを雇ったほうが確かだぜと、付け加えました。

どうでしょう。妹はそれをして、見事にしくじったのです。それとも、腹違いの姉を葬るという目的は果たしたのですから、成功なのでしょうか。

それにしても。半年も経ってから探し始めるなんて——と憤慨して呆れて。あながち、そうでもないと思直しました。ギブソフィラさんが逃げたときも、三方のどちらへ向かったか分からないので、最初から探索を諦めていたのです。

ラメーズからブロンゾは南東の方角です。その途中で襲われました。賊が、もっとも近い他の街を目指すなら真南のアガータです。でも、王都に近づこうとするのでしょうか。襲撃地点から西へ向かえば、ここアンブラです。娼館の存在も（非公式に）知られています。でも、貴族令嬢を王国内で売り飛ばそうとするのでしょうか。ラメーズを迂回して北上し、

遙か東の異教徒の地まで行けば安全です。

いえ。そもそも、私が生きている証拠がないのです。殺して荒野にでも埋めたら、探しようもないでしょう。

今さらというよりも、今になって——たとえばベルタが改心して（まさかですけど）白状したとか、何か新しい動きがあったのだと考えるほうが当たっているでしょう。

そんな当て推量よりも。ここに私が居ることを突き止められたら大変です。

私は連れ戻されて。こんな穢れた女を修道院は受け入れてくれないでしょう。醜聞に出歩かれては伯爵家の面子が丸潰れ。生涯を幽閉されて過ごすことでしょう。そして女将さんたちも罪に問われます。

「へええ、伯爵令嬢ねえ。こりゃいいや。ダリアだけは花代を八アルゲに値上げするかね」

いつの間にか横に来ていた女将さんが笑い転げました。同じことを言った私を半殺しにしたというのに。

これが女将さんの機転というものでしょう。その場は笑い話で終わって——女将さんはお客様に口止めすらしませんでした。

そして翌晩。私は初めて、三人のお客様に同時にお買い上げいただきました。私の狭い部屋（隠喩ではありませんよ）では無理なので、予約無しでも貴賓室です。

五人組の暴漢どものうち二人から同時に犯された経験と、女には使える穴が三つあるという事実から、私はおそろしく破廉恥な行為を想像したのですが。手桶を跨いで指を挿れてお尻の奥まで清めるように求められて、想像は確信に高まりました。そして、三人の男がひとりの女を使う形も、思っていた通りでした。

仰臥したお客様と向かい合う形で私が腰を落として、女の穴に迎え挿れます。それから四つん這いになって、後ろで膝立ちになったお客様が蕾を貫きます。三人目は当然にお口です。

前後の穴を同時に貫かれ抽挿されるのは、素敵な体験でしたけれど、このお客様たちも、女の芽を弄ってくださいませんでした。三頭立てですから私の揺すぶられ方も激しくて、

気分が悪くなりました。

お客様たちは思い思いに罅を明けられて。すぐに、新しい『遊び』を始めました。遊びだと、最初は思っていました。

部屋の隅にあらかじめ用意してあった大きな箱から、お客様が太い縄を取り出されました。縛っていただけるんだと、わくわくドキドキです。

乱淫の跡始末もさせてもらえず、床に座られました。

お客様は、私の両手を前で反対側の肘を掴む形にさせて、腕をぐるぐる巻きにします。折り曲げた脚をぴったり閉じさせて、伸ばしも開もできないように縛りました。それから、檻褌布を口に詰められて、細い紐で頬を縊られました。

いったい、箱の中には他に何が用意されているのでしょうか。

お客様は、私の上体を深く折り曲げていきます。縄が足されて、肩も腰もぐるぐる巻きにされます。

私は“Z”の文字を押し潰したような姿にされました。ぴくりとも動けません。

私は二人掛かりで持ち上げられて、空っぽの（ちょっと失望しました）箱の中に安置されました。まるで私の身体に合わせて作ったように、ぴったりです。

扉の開く音。誰かが部屋に入ってきました。

「これまた嚴重な荷造りだね」

女将さんです。

「あたしだって、おまえを手放したくはないんだけどね。嗅ぎ付けられる前に手を打たなきゃ」

なんだか様子が変わります。『お遊び』ではないようです。

私の上に蓋がかぶせられました。コンコンと釘を打つ音が肌に響きます。

音が焉んで。女将さんとおお客様が何か話しています。箱に遮られて聞き取れません。

身体を揺すられました。いえ、箱ごと持ち上げられて、運ばれています……どこへ？

木箱の隙間から冷たい夜気が忍び込んで、館の外へ運び出されたと分かりました。ごと

んと軽い衝撃があつて。がたごとと揺れ始めました。馬車でどこかへ運ばれているようです。揺れ具合からすると、乗用馬車です。まだしもです。

なんて呑気なことを考えている状況ではありません。いったい、私はどうされるのでしょうか。

真っ先に思ったのは売却です。でも、搜索の手は最下層の売春窟にまで及ぶかもしれません。そうなれば、私の口から『踊る花の館』の所業も明らかになる——そう考えるのが普通です。あの女将さんが、そんな不確かな証拠隠滅を図るのでしょうか。もっとも確実なのは……！！

全身が冷たい鉛の塊になりました。真っ黒な恐怖が心臓を鷲掴みにしました。

殺される！！

いやです！

いやです！！

いやです！！！！

どうしよう、どうしよう、どうしよう……

前の五人組みたいに、依頼主を裏切って、どこか遠くの地へ売り飛ばしてくれないでしょうか。望み薄です。浅墓な妹は、どうせ使用人の誰かに見繕わせた半端者を使ったのでしょうか、こいつらは裏の社会にも通じているしたたかな女将が雇った連中です。私は確実に殺されるでしょう。

頭の芯が痺れて、身体が揺すぶられて気分が悪くなる余裕さえ失せて……

不意に、がくんと大きな衝撃があつて。そのまま馬車は動かなくなりました。闇の中で馬車を駆って、窪みにでも車輪を落としたのでしょうか。

しばらくすると、箱が持ち上げられました。徒歩で運ばれています。じきに今度は地面の上（でしょう）に置かれて。

ざくざくと土を掘り返している音が、ごくかすかに聞こえてきます。

まさか……その後は、言葉にしたくないです。

お願いです、神様。淫乱なうえに被虐を悦ぶような私は、天国へ召されるとは思っていない。地獄の業火に苦しみ続けても仕方ありません(それを悦ぶなんて、とんでもない)。でも、せめて母様が亡くなられた歳くらいまでは生き長らえさせてください。

母様は私の産褥で命を落としました。その歳まで、あと六年。けっしてだいそれた望みではないと思し召してください。どうか神様……

土を掘る音が絶えました。

足音が近づいて来て。箱が持ち上げられました。わずかな距離を運ばれて。どさっと投げ出されました。そして……

どさっ、ざざざ……箱に土をかぶせる音が肌にまで伝わります。ずん、ずん……土を踏み固めているのです。

そうして。ついに一切の物音がしなくなりました。

狭い闇の中に、私は置き去りにされたのです。餓死するよりもずっと早く、私は窒息死するでしょう。それまで、あと何日、いえ何時間？

ああ、何故……わざと捕まろうなどとししないで、もっと周到に企んで逃げてしまわなかったのでしょうか。もっと激しく泣き叫んで耳を愉しませ、うんと甘えて気に入っていただけだったら、ブルーノ様に落籍していただくのはデイジェスちゃんではなく私だったかもしれないのに。大商人のお屋敷の奥までは搜索の手も及ばないでしょう。ラメーズ伯の紋章も、他領の有力者には通用しないでしょう。

どんな後悔も手遅れです。折檻で教えられた窒息の苦しみも、二度と味わいたくありません。神様、最後のお願いです。せめて、眠っているうちに命を……

※続きは製品版でお楽しみください。

著 者：濠門長恭

表紙絵：藤間 慎三

発 行：SMX工房

ブログ：<https://goumonchoukyou.jp/>